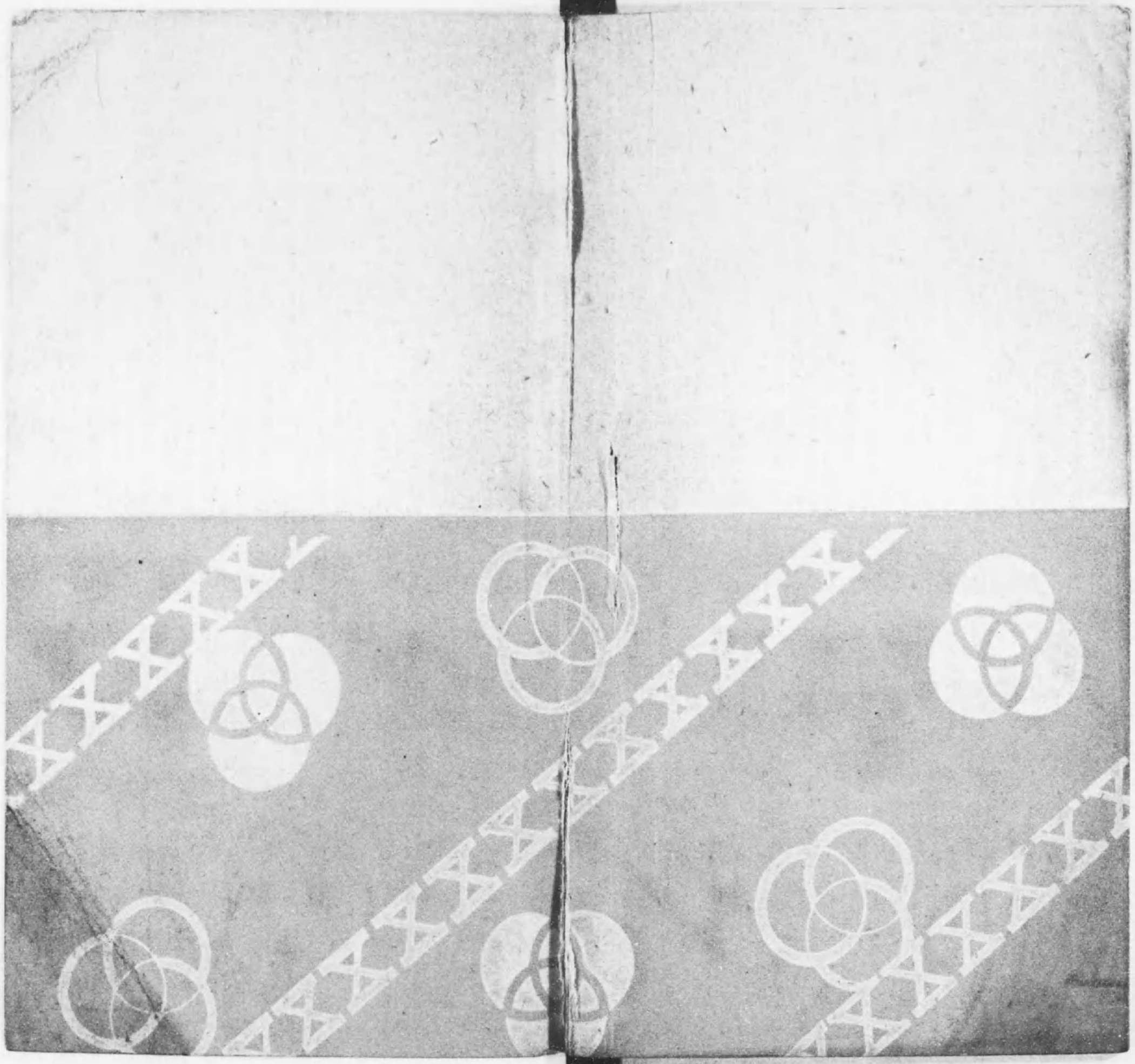
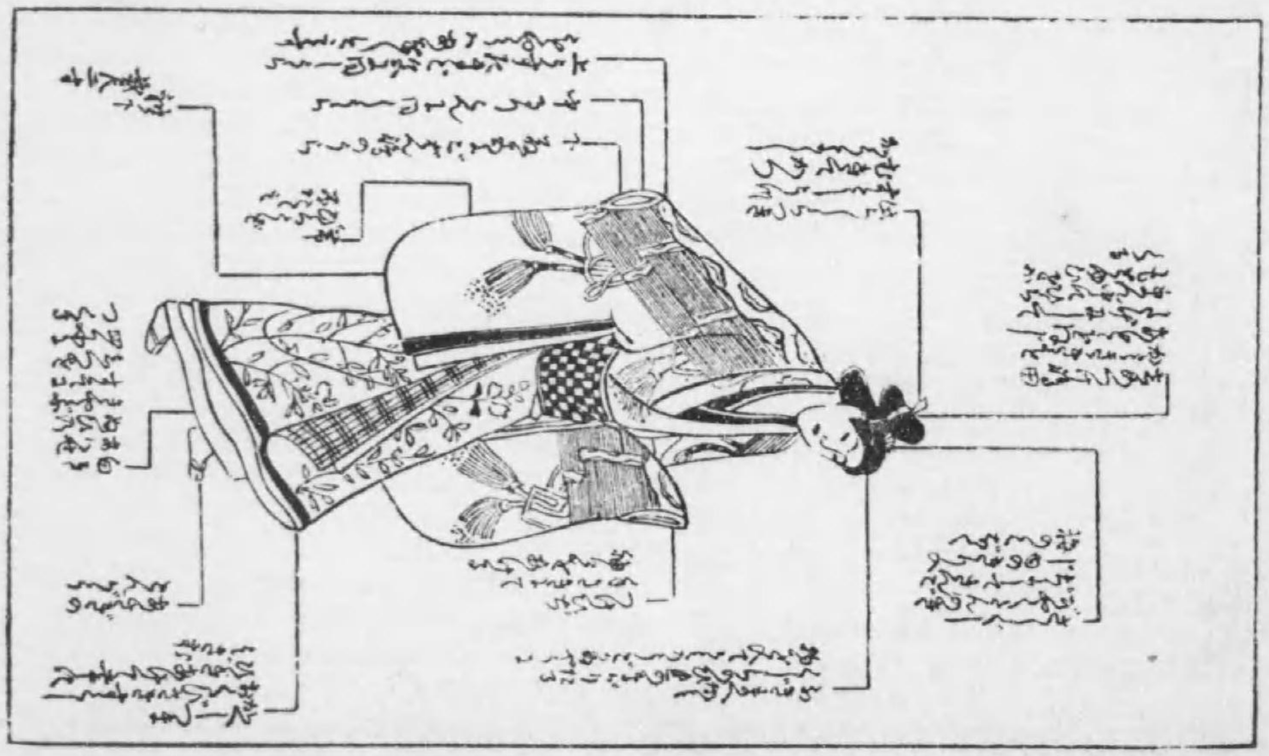
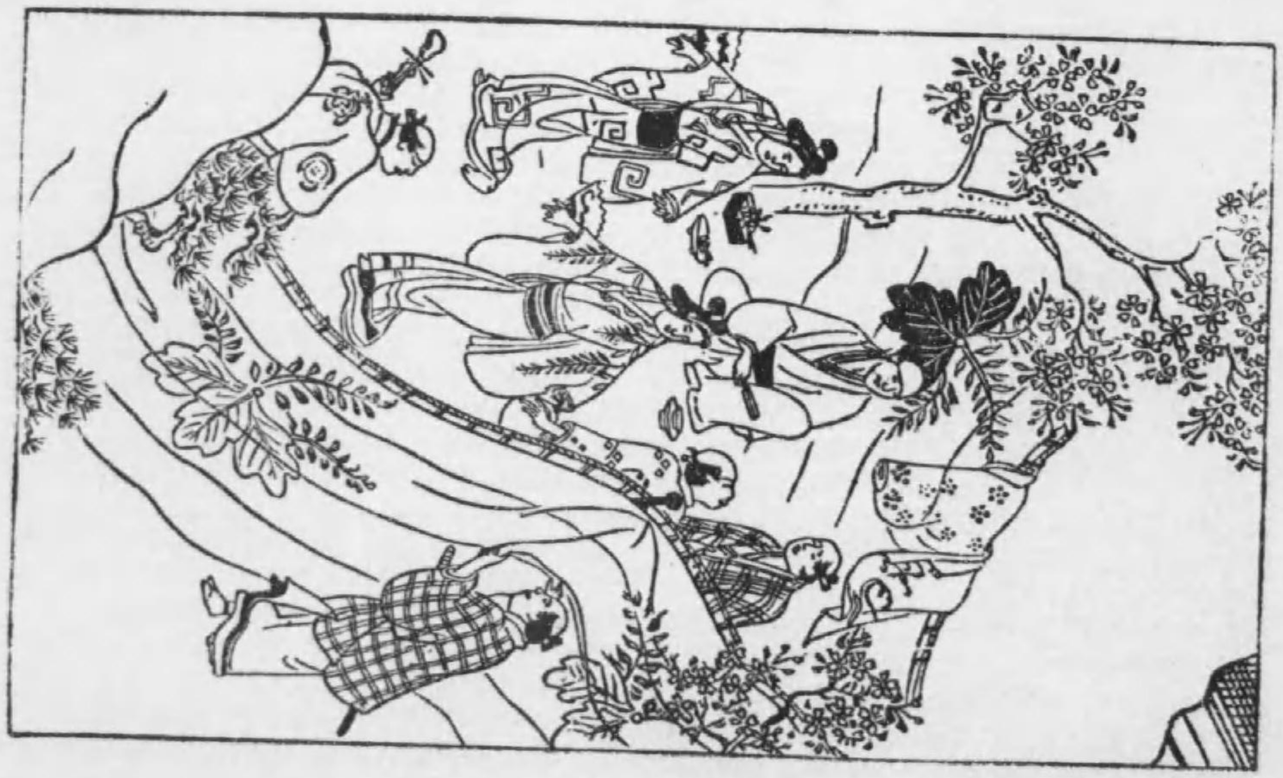
五人女

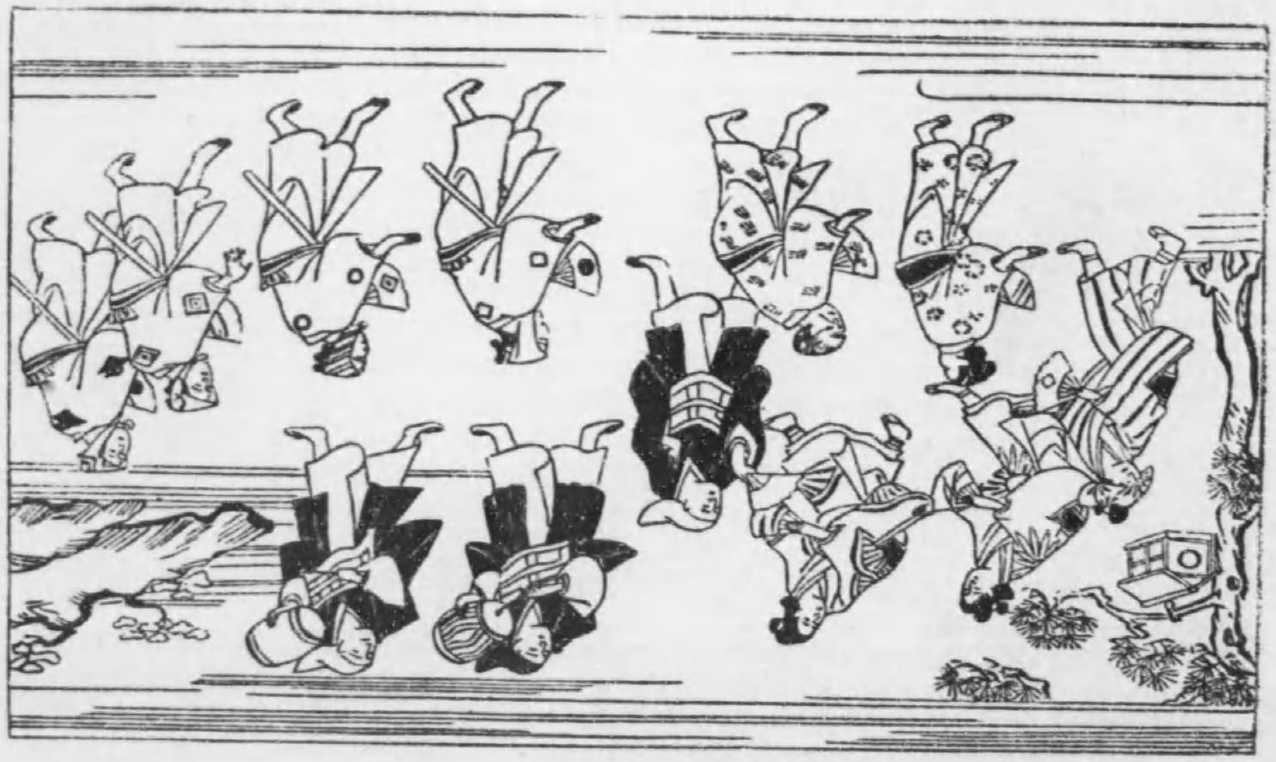
始

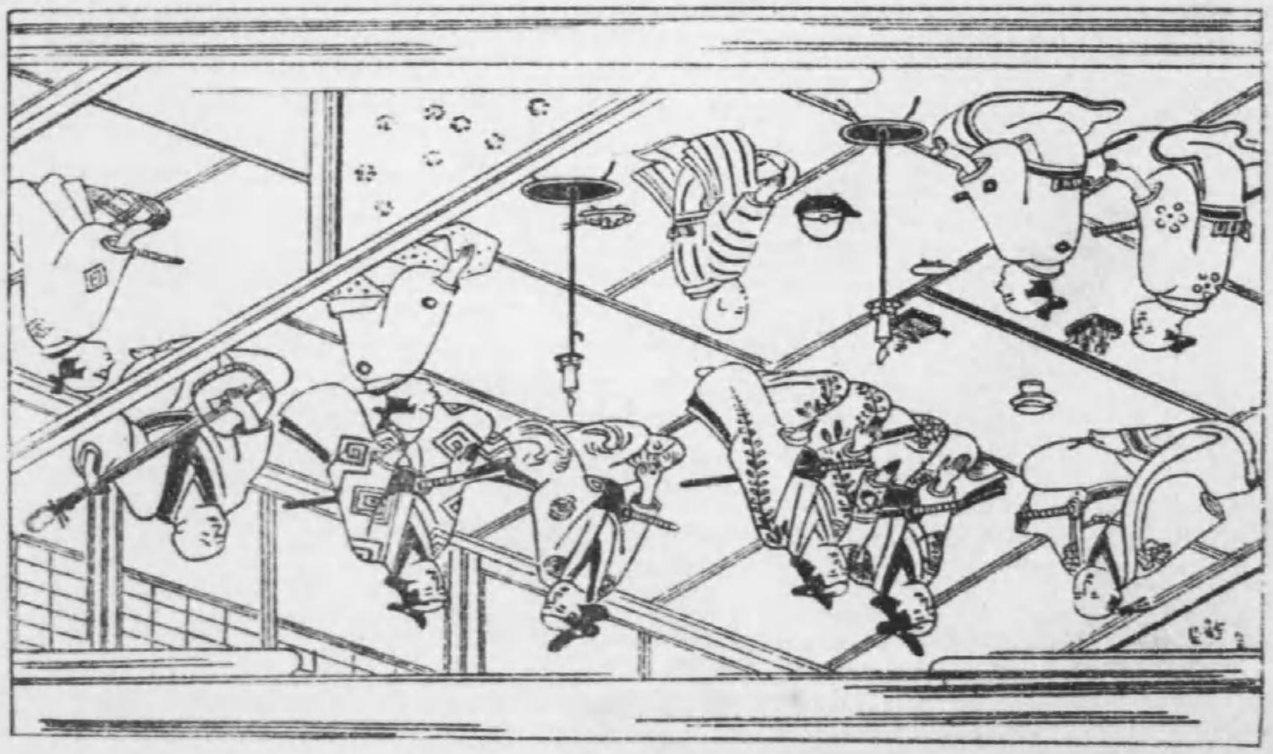


特110
76









本書は西鶴の作物中最も傑れたもの、一つで、全篇五卷、貞享三年の出版である。我が文學の未だ草昧時代に、この偉大なる藝術家が如何程まで深刻なる手腕を有してゐたかを知るに、好個の作品である。譯文は努めて原文の妙趣を損はぬ事を期した。

井原西鶴原著

新譯 五人女

目次

卷の一

(一) 思ひ闇夜を晝の國……二
室津にかくれなき男をこと あり

(二) くけ帶より現るゝ文……一〇
姫路に都まさりの女あり
(三) 狀箱は宿に置いて來た男……一八
心あての世帶大きに違あり
(四) 命のうちの七百兩の金……二九
世にはやり歌きけば哀あり

巻の二

(一) 惱み泣く輪の井戸替……三五
相釣瓶も思ひに亂るゝ縄あり
(二) 踊は崩れて桶夜更て化物……四四
人は怕しや蓋して見せぬ心あり
(三) 京の水漏さぬ中忍びて合釘……五六
目印の錐紙に書付てあり
(四) こけらは胸の燒付新世帶……七三
心正直の細工人天滿にあり

(五) 木屑の杉楊枝一寸先の命……七九
りん氣に逆目をやる杉あり

巻の三

(一) 姿の關守……八七
京の四條はいきた花見あり
(二) してやられた枕の夢……九八
炎すうるより思ひに燃るあり

(三) 人をはめたる湖……一〇七
死もせぬ形見の衣裳あり
(四) 小判知らぬ休み茶屋……一一五
都に見し土人形あり
(五) 身の上の立ち聞……一二八
夜の編笠仔細ものなり

巻の四

(一) 大節季はおもひの闇……一四〇
かり着の袖に二つの紋あり
(二) 虫出し神鳴も褌かきたる君様……一四七
化物おそれぬ新發智あり
(三) 雪の夜の情宿……一五一
情の道しる似せ商人あり
(四) 世に見をさめの櫻……一六〇
惜や姿の散る人あり

(五) 様子あつての俄坊主……一七一
前髪は又花の風より哀あり

巻の五

(一) つれ吹の笛竹息の哀れや……一八二
さつまに酸れなき當世男あり
(二) もろきは命の鳥さし……一九一
床は昔となる若衆あり

五人女目次をはり

(三) 衆道は兩の手に散る花……一〇〇
中剃はいたづら女あり
(四) 金銀も持ち餘つて迷惑……二二三
三百八十鍵あづかる男

井原西鶴原著

五人女

太田柏露譯

五人女卷の一

▣思ひは闇夜を畫の國

播州室津の賑やかな港場に、和泉蒋左衛門といふ富裕な造り酒屋があつて、そこに清十郎といふ息子があつた、清十郎は繪に描いたやうな美男子であつた。十四の時から早くも女を知つて、この港に八十七人あつた遊女に一人として馴染でないのは

なく、誓紙は千束に積り、爪は手箱に餘り、切らせた黑髪は大綱に絢はせるほどもあつた。

その時分清十郎は皆川といふ遊女にひどく熱くなつてゐて、世間から何と云はれようが、そんな事には耳も藉さなかつた。その日も朝から耽溺して、馬鹿の限りを盡した揚句、今度は畫のない國をして遊ばうと云ふので、座敷の雨戸を悉く締切つて提灯を點し、さて多勢の幇間どもには夜廻りの番太の拍子木を打たせる、蝙蝠の鳴き眞似をさせる、遣手婆さんには門茶を

焚いて歌念佛を唱へさせる、死にもせぬ者の冥福を祈るためだと云つて精靈を祭り、楊枝を燃やして送り火に擬へるなど、凡そ夜するほどの事を爲盡してしまふと、今度は繪で見た裸島をやらうと云つて、家中の着物を無理やり脱がせたりして、大騒ぎをしてゐる最中に、思ひも依らぬ俄風、清十郎の父の清左衛門が怕しく怒つて尋ねて來た。一同は何うにも胡麻化しの附けやうがなかつた。

『道樂はこれでさつぱり止めますゆゑ、どうぞお許し下さりま

せ』

清十郎は怒りきつて突立つてゐる父の前に小さく畏まつて、穴にでも這入りたい心持で詫びを云つた。併し父は何と云つても聞き入れなかつた。

『おさらばぢや』

と云つたまゝ、間もなく歸つて行つてしまつた。

皆川を始め外の女たちは泣き出した。すると幇間の一人の闇の夜の治介といふ男が一向落ち着いた樣子で、

『男は裸百貫、たとへ何をしたとて世は渡れまするわえ、もし清十郎様、少しもお案じなさるには及びませぬぞよ』

といふ内にも、もうお道化だしてゐるので、清十郎はこれを肴にまた酒を始めて、せめてもの憂さを晴さうとした。併し變りやすいは色里のならひ、人の情は一歩小判のある内である。揚屋ではもう様子ぶりをして、手を叩いても返事をしなくなつた。待ちくたぶれた時分に、やつと料理が運ばれたかと思ふと歸りしなに油火の灯心を減らして行く、取巻きの女たちは一人

よばれ、二人よばれ、とうゝ座敷には誰もゐなくなつてしまふ。……

皆川の身にすれば、これほど悲しいことはなかつた。彼女は獨り跡に殘つて泣き沈んでゐた。清十郎はもう口惜しさと傷さとで溜まらなくなり、いつそのこと命を捨てようと決心した。が、さうしたなら、この女も必らず一緒に死なうと云ふに違ひない……と思ふと、新たに悲さが湧いて來た。

皆川は様子を見て取つて、

『かた様は身を捨てようといふ御様子さうなが、てもまあ愚しやー　わが身も御一緒にと申上げたうは御座んすが、どうしてもまだ此の世に未練があつてなりませぬ、勤めはそれ〴〵に變る心ぢやほどに、何事もみんな昔の夢ぢやと諦めて下さんせ。では是れまで、御座んすぞえ……。』

斯う云ひ置いて、皆川は座敷を立つて行つてしまつた。この思ひ掛けない爲打に、清十郎は始めて迷ひの夢から覺めたやうな氣がした。

『いかに傾城ぢやとて、今までの誼みを踏み捨てた淺ましい心底、このやうな無茶なことがあるものか！』

と、清十郎は口惜し涙に咽んで、出て行かうとした。すると其處へ早くも白裝束に姿を替へた皆川が駈け込んで來て、清十郎に寄り添つた。

『死なずに何處へお行きやるぞえ、さあさあ、今ぢや……』

と、おろ〳〵聲で急き立てながら、剃刀を二挺とり出した。

清十郎の混亂した頭の中へ忽ち大喜悅の光明が颯と耀いた。そ

の途端に、家中の者がどやゝと駈けつけて來て、いきなり二人を引き分けてしまつた。そして皆川は親方の處へ連れて行かれるし、清十郎は家への詫言の種にもならうといふ一同の意響から、多勢の者に取卷かれて旦那寺の永興院へ送り届けられることになつた。その時清十郎は十九であつた。

▣くけ帶より現るゝ文

皆川は無事に親方の方へ連れ戻されはしたが、その内家人の

隙を見て、遂に自害した。その事を聞くと清十郎は、どうせもう死におくれたのだと云ふ捨鉢の氣になつた。それに母親から云つて寄越した慈愛の言葉も手傳つて、兎も角も死ぬる事だけは思ひ止まると共に、窃かに永興院を忍び出て、同國姫路の知人を頼つて行つた。

先方では昔の事を思ひ出して、流石に惡くは取扱はなかつたそこで清十郎は暫らく厄介になつてゐる内に、但馬屋九右衛門といふ商家で店を任せる手代を捜してゐるのに出會つた。知人

の家では、あそこならば將來のためにもなるだらうと云ふのでその世話で清十郎は始めて奉公人の境涯に這入ることになつた

何と云つても裕な家に育つた身、たとひ奉公人に成り下つても何處となく品がある、氣質は優しいし、人並すぐれて利口ではあるし、誰にでも氣に入られさうな樣子である。殊にその男ぶりの好さ！

こひといふものに染み〴〵飽き果てた清十郎は、憂世を捨てた氣で、明けくれまめやかに立働いた。主人九右衛門の悦びは

一方でない、萬事を清十郎まかせにして、行末の力と頼むやうになつた。

ある時のことである、清十郎は龍紋の不斷帶の幅がちと廣すぎて氣に入らないので、それを紆け直して貰ひたいと、中働きの龜といふ女に頼んだ。龜は二つ返事で受取つて、さて何氣なしに解いて見ると、中から古い文殼が出て來た。紙數は十四五枚もあつて、宛名は皆な『清さま』と書いてあるが、裏書はそれ〴〵違つて、花鳥、うきふね、小太夫、明石、卯の葉、筑前

千壽、長州、市之亟、こよし、松山、小左衛門、出羽、みよし、などと云ふ遊女らしい名が樣々な文字で認めてあるのである。そして何の文を讀んで見ても、みな女の方から深く打込んでゐて、商賣人の手管らしい處は微塵もなく、誠の籠つた文字に滿ちてゐるのである。龜は清十郎の過去を目のあたりに想像して淡い嫉妬を感ぜずにはゐられなかつた。此の新らしい發見は中働きの口から家中の女たちの耳から耳へと囁かれた。

主人九右衛門に、お夏といふ今年十六になる妹が一人あつた

立ち優れた綴縹よし田舍には素より、廣い都にもたんとはないほどの女振りである、この年になるまでに早くも人の情けを知り初めても、未だに定まる緣もなかつた。このお夏が何時となく清十郎を思ふやうになつた。お夏の思ひは日に增し募つて、いつか魂は身を離れて清十郎の懷に入り、自分は現が物を云つてゐるやう、春の花を闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙も白くは見えず、夕ざれの時鳥も耳に這入らず、盆も正月も更に分からない。只だ〳〵清十郎を慕ふ思ひに懊んで、吾を

忘れる程であつた。

思ひに耽るお夏の恥かしさうな目を見るにつけ、思ひにやつれた傷らしい姿を見るにつけ、召使の女たちはひどく同情してどうぞして願ひを叶はせて上げたいものだと噂し合つた。その癖、この女たちとても、とくの昔からそれ〴〵清十郎に思ひを寄せてゐたのである。お物師はお手の物の針で血を絞つて、思ひのたけを書き送り、中働きは男手に文を書いて貰つて、そつと袂に投込み、乳母は赤ちやんに事寄せて近づかうとした。また下働きの女は女で、惣菜を盛る時、特に清十郎の分には好い所をと氣を附けた。

斯うした方々からの心中立ても、清十郎の身に取つては嬉しくもあり、悲しくもあつた。その内に外へ出歩く方の用事が忙しくなつたので、一々返事を書いてゐる隙もなかつたが、しまひには最うそんな事を思ふのさへ厭になつて來た。

さもあれ、清十郎が情ない風をすればするほど、お夏の思ひはいや増す計りであつた。尚も人に頼んでは、燃ゆる思ひを書

き送つた。その優しい濃かな情を思ふと、清十郎もいつか心を動かされるやうになつた。とは云へ、人目せはしい家の中の事であるから打ち融けて語り合ふ隙とてはない、互ひに胸を燃やして、やつれて行くばかりで、漸うその人の聲を聞き合ふのをせめてもの樂みにしてゐるだけであつた。

狀箱は宿に置いて來た男

思ひ詰めた乙女の一念は遂に自ら機會を作つた。お夏と清十

郎とは日頃の願ひを漸くにして叶へることが出來たのである。

併し重ねて此の機會を得ることは、今の二人の境遇にとつては容易でなかつた。さうかと云つて、一たび味はつた杯はもう忘れることが出來なかつた。清十郎の背て受けた胸の痛手は跡方もなく消え失せて、新な思ひが怖ろしい勢で甦へつて來た。遂に清十郎は大膽にもお夏を連れ出して、上方へ上つて、貧しくとも二人住まひの樂しい世帶を持たうと決心して、二人は窃かに家を抜けて出た。

濱びさし幽かな所に船待ちをしてゐる思ひ思ひの旅姿、伊勢參宮の人もあれば、大阪の小道具賣、奈良の具足屋、醍醐の法印、高山の茶筅師、丹波の蚊帳うり、京の呉服屋、鹿島の事觸十人よれば十國の者、乘合船の面白さはこゝにある。

『さあ〳〵、出しますぞえ。』

船頭の胴間聲が響き渡ると、やがて船は岸を離れた。折からの順風に、十分に帆を孕ませて、はや一里あまりも來たと思ふ時、備前から來たといふ飛脚が出しぬけに横手を打つて、

『さあ忘れた！　刀に括りながら、すつかり狀箱を宿に置いて來てしまうた！』と叫んで、うろたへ眼で磯の方を見遣つて、

『それ〳〵、持佛堂の脇に持たせ掛けて置きましたのぢや。』

斯う云つて騷いでゐる飛脚の男の樣子と云ひ、事情と云ひ、いかにも氣の毒なところから、乘合の人々の發議で、船を戻してやることになつた。

船が岸に着くと、そこへ姫路から出張つてゐた追手の者がどや〳〵と進んで來て

『もしや此の船に居ないかな』

と云つて、人改めに掛つた。

お夏と清十郎とは何處へ隱れることも出來ず、隅の方へ少さく寄添うて『悲しい、悲しい』とばかり、おど〳〵してゐるのであつた。哀れ知らずの追手どもはそんな事には耳も藉さず、すぐさまお夏は嚴重な乘物に入れ、清十郎には繩を打つて、姫路の方へ歸つて行つた。綺麗な若い男女の痛ましい歎きを目擊した人々は、誰あつて袂を濕さぬ者はなかつた。

清十郎はその日から座敷牢に入れられた。併しその憂さ辛さの中にも、自分の事は偖て置いて、只だ〳〵お夏はどうなつたらうかと思ひ患うてゐた。

『あの飛脚の男めが狀箱さへ忘れなんだなら、今時分は大阪に着いて、高津あたりの裏座敷でも借りて、婆やを一人つかうて先づ五十日ばかりは夜晝なしの樂寢をしようと、お夏と內談してゐたものを……思へばみんな昔の夢ぢや、誰ぞ殺して呉れんかいな。あゝ〳〵、一日の長いこと！　もうもう世の中が厭に

なつた。』

清十郎はつく〴〵身を持て餘して、舌を齒に當て、目をつぶつて、一思ひに死んでしまはうと思つたことも幾度あつたか知れなかつた。とは云へ、さうした思ひ詰めた氣になつた瞬間にも、尙ほお夏に未練が殘つて、どうぞして最後の別れに今一度あの美くしい顏が見たいと、見得も外聞も忘れて男泣きに泣くのであつた。

お夏とても歎きは同じことで、七日の間斷食して、室の明神

へ願狀を書いて、清十郎の命乞ひをした。丁度七日目の滿願の夜中の事であつた。不思議にも一人の老翁が枕神に立たれてさてもあらたかなお告があつた。

『私が今云ふことを好く聞けよ。とかく世間の者どもは、何ぞ悲しい事が出來ると、至つて無理な願ひを持ち込んで來るが、そのやうな事はこの明神の自由になるものではないのぢやぞよ俄かに福德を祈つたり、人の女を忍んだり、さては憎い者を取殺してくれの、降る雨を日和にして呉れの、生れついた低い鼻

を高うしてくれのと、さま〳〵の思ひ事を、とても叶はぬに極つてゐるに無用の神佛を祈つて、厄介を掛けをる、不都合千萬ぢや、いつぞやの祭の時にも參詣の輩一萬八千十六人、その何奴もが大慾に身の上を祈らぬ者はなかつた。聞いてゐて可笑しうはあつたが、賽錢を投げるのが嬉しく、神の役目で聞いてゐたのぢや。この參詣の中に、たつた一人信心の者があつた。それは高砂の炭屋の下女ぢや。何心なく拜んで歸つて行かうとしたが、ふいと小戻りして『私にも好い男を持たせて下さり

ませ』と申すのぢや。『それは出雲の大社へ賴め、わしでは勝手が分からぬ』と云つてやつたが、聞えなんだのか、そのまゝ行つてしまうた。その方も親兄弟の云ふ通りの男を持てば別の事もないに、色好みをするからそんな迷惑に遭ふのぢや。その方が入らぬといふ命は長いが、生き延べさせたいと云ふ清十郎は今に最期であるぞよ。』

お夏はそれをあり〳〵と夢に見て、餘りの悲しさに目を覺ましたが、急にまた心細くなつて、その夜を泣き明した。案の如

く清十郎は召し出されて、思ひも寄らぬ詮議に遭うた。但馬屋の内藏の金簞笥に仕舞つてあつた小判七百兩が紛失した。これは清十郎がお夏を唆かして盗み出させて、持ち逃げをしたのに相違ないといふのである。不幸にも折が折であつたので、清十郎の申分は通らなかつた。それがため清十郎は哀れや二十五の四月十八日に其の身を失うてしまつたのである。然るに六月の始めに家内の虫干をしたところが、彼の七百兩の金は置き所が變つて車長持の中から出て來たとやら。

「物には念を入れべきぢやわい。」

仔細らしい何處やらの親父が斯う云つた。

命のうちの七百兩の金

何事も知らぬが佛、お夏は清十郎が死んだなぞとは夢にも知らず、とやかく物思ひに耽つてゐる折しも、里の子供が袖ひき連れて、

「清十郎ころさば

お夏も殺せ……

……』

と唄うて通つた。

お夏はその歌を聞くと、妙に氣に懸つたので、自分を育てた乳母に譯を尋ねた。併し乳母は返事をしかねた樣子で、はらはらと涙を落すのである。早くもそれと見て取つたお夏は、

『さては清十郎樣が、然うであつたか！』

とばかり、物狂はしくなつて、いきなり表へ飛び出したかと

思ふと、自分も子供たちの仲に交つて、音頭を取つて歌ひ出した。餘りの事に人々は驚いて、いろ〳〵宥めつ賺しつしたが、お夏は聞き入れようともしないのである。間もなくお夏の兩眼からは涙が雨のやうにはふり落ちた。

『むかひ通るは清十郎
でないか、笠がよく
似たすげ笠が……』

清しい顏へ聲で、すゝり泣くやうに斯う歌つてしまふと、囃

しまで賑やかに附け添へて、さても嬉しさに堪へぬやうに、けら〳〵と笑つた。お夏は遂に氣が狂つたのである。

清十郎が年ごろ懇意にした人々は語り合つて、せめては清十郎が死んだ跡だけでも遺して置かうと云つて、草葉を染めた血を清め、屍を埋んだ印に松の木などを植ゑて、清十郎塚と云ひ觸らされた。お夏は夜ごとにこゝへ詣りに來て、一心に菩提を弔うた。疑ひもなく、斯うしてゐる内に、清十郎がありし昔の面影をまざ〳〵と見たのであらう。

やがて日を重ねて百ケ日に當る時、お夏は露草の上に座つて守り脇差の鞘を拂うて、あはや其の身も自害に及ばうとしたがやうやく人々に引止められた。そして一同の切なる勸めもあつたので、お夏は心を落ち着けて考へた揚句、遂に正覺寺といふ寺へ行つて、上人をたのんで得道を濟まし、十六の夏衣をけふから墨染めにして、朝に谷の下水を掬び上げ、夕に峰の花を手折り、夏中は毎夜手灯をかゝげて大經の勤め怠らず、有難比丘尼とはなつたのである。すると兄の但馬屋も發心して、新に現

れた七百金で佛事供養をして、清十郎を弔つたと云ふのである。

五人女卷の二

圖 惱み泣輪の井戸替

人の命には限りがあるが、限りないものは他にもある。無常を我が手細工の棺桶に覺え、錐のこぎりの忙しく、鉋屑の煙みじかく難波の芽の屋を借りて、天滿といふ所に住んでゐる桶屋があつた。

その近所の家主の家に、おせんと云ふ小潚洒した腰元があた十四の年の大晦日に、親里の御年貢に差詰まつた處から、この家に腰元に遣られたのであつたが、生れつきが利口者で、隱居への心づかひ、奥様の機嫌を取ること、さては下々の者への思ひやりまで何時の間かに呑み込んで、手落ちなく立廻るので、やがては内藏の出し入れをも任され、おせんは此の家になくてはならぬ者になつたのである。それであて艶いた心は少しもなく、浮いた噂などは遂ぞ聞いたことがない。笑談に袖を引かれ

た丈けでも、遠慮なしに大きな聲を立てるので、男は氣味惡がつて、それからと云ふものは此の女に言葉を掛けるものがなかつた。

折から秋のはじめの、七月七日のことである。織女に借小袖と云ふので、奥ではまだ仕立てゝから一度も袖を通さぬ小袖をかさね、梶の葉にありふれた歌などを書いて祭れば、下々の者もそれ〴〵唐瓜や枝柿を飾つて七夕祭をするのである。さて表では、今日も、家主の井戸替だといふので、横町から裏長屋の

者までが總出で、大騒ぎをしてゐる。濁水も大概汲み減つて砂が上つて來るやうになると、いつぞや見えないと云つて人に疑ひをかけた庖丁も出て來れば、何のためにしたものか昆布に針の差さつてゐるものも上がつて來る。尙ほ捜して見ると、駒引錢、目鼻のない裸人形、安物の鰥の目貫、繼ぎ〳〵の涎掛、蓋なしの外井戸のことであるから、さま〴〵な物が上がつて來るのである。

湧き水はすぐに殖えて來た。そして根輪の處まで來た時に、

古い合釘が離れて根輪が壞れたので、桶屋を呼んで來て新らしい箍を入れさせた。ふと傍を見ると、替へ水のちよろ〳〵流れを堰き止めて、見窄らしい姿の婆さんが何やら生きた虫をいじつてゐた。

「何ぢやえ、それは？」

と、桶屋が尋ねた。

「うゝん、これは今汲みあげた井守といふものよ。そなたは知らぬかな、この虫を竹の筒に入れて黒燒にして、思ふ人の黒髪

に振りかければ、向から慕うて來るといふ稀代な藥ぢやがな。』

と、婆さんは如何にも尤もらしく答へた。この女はもと夫婦池の小さんと云ふ子墮婆であつたが、その商賣が禁ぜられたので、今はそんな殘忍なことは廢めて、素麵の臼などを曳いて其の日暮しをしてゐるのである。

婆さんは尙ほも言葉を續けて、くど〳〵喋るのであつたが、桶屋は外の事は少しも耳に入れないで、只だその井守を黑燒にして藥にすることばかりを愚痴に聞くのである。婆さんも仕舞

ひには氣の毒になつて、

『誰にも聞かせはせぬ、全體そなたの思ふ人はどんなお方樣ぞえ？』

聞かれて桶屋は唾を呑むこと二度三たび、やつきとなつて云ふには、

『そのお方樣は外でもない。この內かたのお腰元おせんが、おせんが……百度の文の返しもないのぢや。……』

と、目に涙さへ見せてゐるのである。

婆さんは頷いて、

『さうかえ。それぢやつたら井守も絲瓜も入りはせぬ。私が堀川の橋かけて、この話をきつとまとめて間もなく思ひを晴らさせて上げようぞえ。』

と、雜作もなく請合ふので、桶屋は驚いて、

『時分がらの世の中ぢやに依つて、金銀の入ることなら、口惜しいけれども何うにもならぬ。あれば何の惜みはしよう。正月に木綿着物、染めやうは勝手次第、盆に奈良晒の中ぐらゐなの

を一つ、内證はどうぞこんな事で埒の明やうにして下されい。』

『なんの、なんの、それは慾に引かれる者の云ふことぢや。私が頼まれるのは、そのやうなのとは譯が違ふ。只だ先に思ひ付かせる仕掛けが肝腎なのぢや。したが、この年月、幾千人とも數知れぬ人の肝煎して、譯の惡かつたといふ事は只の一度もなかつた。菊の節句より前に、きつと會はせて上げるぞえ。』

燃えさかる胸に一層たきつけられて、桶屋は嬉しかつた。

『かゝ樣一代の茶の樹は私等が續けてあげるぞえ。』

とさ。いつまで生きれるか知れぬ憂世に、大分のことを請合ふたものかな。

踊はくづれ桶夜更て化物

天満に七つの化物がある、大鏡寺の前の傘火、神明の手なし兒、曾根崎の逆女、十一丁目の首しめ縄、川崎の泣坊主、池田町の笑ひ猫、うぐひす塚の燃えから臼。いづれも皆な年を經た狐狸の爲業に違ひない。それよりも世に怕ろしいのは、人間が

化けて命を取ることである。

七月二十八日の夜、いつしか更けて、軒端を照らした燈籠も影なく、今日明日ばかりと名殘に聲を嗄らした馬鹿踊の人々もそれ〴〵家へ歸つてしまひ、四辻の犬さへ夢を見てゐる時分に彼の桶屋に頼まれたいたづら婆さんは、家主の門口がまだ細目に開いてゐるのを見澄まし、いきなり戸をがらりと引き開けて内へ駈け込み、臺所へ轉がり寢て、

『やれ〳〵怕ろしや……水が呑みたい！　水が呑みたい！』

と、今にも息の切れさうな悲鳴を擧げた。

家の者は肝を潰して駈け寄つて見ると、まだ息が通つてゐるので、それを頼りにして呼び生けると、何の事もなく正氣づいた。

『まあ〳〵好かつた。全體、何がそんなに怕かつたのおやえ？何か目に見えでもしたといふのかえ、もし？』

隱居をはじめ家の人たちは、婆さんの顏を覗き込むやうにして尋ねた。

『さればさ』と婆さんはしたり顏で、『年寄の夜歩きなんぞ、云はれることではありませぬが、宵から寢ても目が合はぬあまりに、踊見に參りましたところ、ちやうど鍋島どのゝお屋敷の前で京の音頭道念仁兵衛が口うつしの山くどき、松づくし、惚れ〳〵するほどで御座ります。あまたの男の中を押分けて、團扇をかざして見てをりましたが、闇でも人は賢く、若造りの白帷子に黑帶の結び目を當世風に哨はやつて居りましても、笑談にも私の尻を抓る人は御座りませぬ。ほんに女子は若いうちの物

ちやと、少しは昔の事も思ひ出して口惜しくなり、歸りかけてお内のお門近くまで來ますると、年の頃なら二十四五の優男が私に取りつき、「思ふ思ひが届かないで今思ひ死にをするのぢやあゝ、あゝ、腰元のおせんと云ふ女の情なさ！　この執念は外へは行くまい。七日の内に此處の家内を一人も殘さず取殺してくれるぞ」と云ふたかと思ふと、どうですえ、鼻がぬつと高うなつて、顔は眞赤、目の玉がぎらぎら光つて、ちやうど住吉の御祓の先へ立つお方樣そつくり！餘りのことに肝を潰して、只

もう怕さ一心で内方樣へ駈込みました譯で御座りまする。」

語り終つて、婆さんは尙もその時の物凄さを目に見るやうに身顫ひするのであつた。

一同が驚き呆れてゐる時、隱居は涙を流しながら云つた。

『思ひ慕ふといふ事は、何も世の中にないことではない。せんも緣付き頃ゆゑ、若しその男が世渡りの道をわきまへてゐて、博奕や後家ぐるひもせず、まめやかな者であつたら、幾らも嫁にやるものを、何處の者とも知れぬのでは爲方がない。ほんに

その男は不憫なものぢや。』

一座はひつそりとなつて、暫くは物を云ふ者もない。婆さんの爲組んだ芝居は、ぽつぽつ圖に當つて行くのである。

夜中ごろになつて、婆さんは人々に手を引かれて我が家へ戻つた。さてこれからどうしたものかと思案の内に東窓が白みかけて、隣からは火打石の音が聞える、赤ん坊が泣き出す。紙帳が破れてゐた爲め、夜つぴて喰はれた蚊を恨んで追ひ拂つてゐる者がある。さうかと思ふと、蚤を取つてゐる片手に、佛棚か

ら小錢を取出して、つまみ菜を買ふ者があるなど、物の忙しい世渡りである。

やう〳〵朝日が耀いて、秋風が身に染まぬほどに吹いて來ると、婆さんは鉢卷をして、さも大病人らしく見せかけ、煎じ藥をしてゐるところへ、おせんが裏口から見舞に來て、

『お氣合は如何さまですえ。』

と、やさしく尋ねた。そして左の袂から奈良漬の瓜を片船、蓮の葉に包んだのを取り出して、薪束の上に置いたが、ふと思

ひ出したやうに、

『さう〳〵。醤油のたまりを持つて參じませう。』

と云ひ捨てゝ、出て行かうとするので、婆さんは呼び止めた

『私は其方ゆゑに思ひもよらぬ命を捨てるのぢやが、自分の娘といふものは無に依つて、死んだ跡はどうぞ弔うて下さんせ。』

と云ひながら、古びた苧桶の底から赤い織紐の附いた紫の革足袋を一足と、繼ぎだらけの珠數袋とを取り出して、珠數袋の中にあつた離縁狀だけは取つて捨て、この二品をおせんに形見

として渡した。

女心の儚く、おせんはこれを本氣にして泣き出した。

『わたしに心のあると云ふ方が本當にあるならば、何故その道に精しい此方樣をお頼みやらぬのやら。思はくを知らせて下されば、それをいたづらにはしますまいに……。』

聞くからに婆さんは心の中で微笑んだ。今こそ好い機だと思つたので一分始終を物語つた。

『斯うなつたら何も隱すまい。かねがね私に頼まれてゐる志

の深いことゝ云ふたら、それは／＼哀れとも不憫とも云はうやうがないわいな。のう、おせん様、このやうな男をお見捨やるやうぢやつたら、私が執念とても脇へは行かぬぞえ。』

多年の口上手に云ひ捲られて、おせんも自然に靡き心になつて、もだ〳〵と上氣してしまつた。

『そんなでしたら、いつでも其のお方に會はせて下さりませ。……』

と云ふさへ恥かしく、嬉しさうなのである。

『しかと承知しましたぞえ。それに就いて一段の出會場所を分別しました』と云つて、婆さんは聲を低めて、八月の十一日といふ日にお伊勢様へ抜け參りと出懸け、その道すがら染み〴〵と物語るのも憎うは御座んすまい。而かもあの男ぶりぢや。』

口から出まかせに唆かせば、おせんも會はぬさきから其の男を焦れ出し、

『して、物も書きやりますかえ？　頭髪はうしろ下りで御座りますやろが、お職人衆ならば腰は屈んで居りませぬかえ？』

何も彼もごつちやにして話し合つてゐる内に、中働きが聲を
かけて、
『おせんどの、お呼びなされますぞえ。』
と呼ぶので、萬事はいよ〳〵十一日のことにして歸つて行つ
た、

▣京の水もらさぬ中忍びて合釘

朝顔の盛りには朝眺めが涼しさも一層であると、宵の口から

奥様のお聲がゝりで、家を離れた裏の垣根に腰掛を並べ、毛氈
を敷かせ、重菓子入には煎菓子、そぎ揚枝から茶瓶まで用意さ
せて、
『明け六つの少し前に行水をするぞえ。髪は對三つ折にしよう
帷子は廣袖に桃色の裏付を出いてお呉れ、帶は鼠繻子に丸づく
しのにして、お腰は飛紋の白いのがよからう。斯うして何や彼
やに氣を附けねばならぬのは、隣町から人も見るぢやに依つて
下々にも繼ぎの當たらぬ帷子を着せてお呉れよ。それから天神

橋の妹のところへは、いつも起る時分に迎ひの乘物をやつて貰はう。』

奥樣は萬事を腰元のおせんに任せて、廣々とした蚊帳の中へお這入りになると、やがてお寢入りになるまで、侍女の手から團扇の風が靜かに戰いでゐた。

我が家の裏の草花を見るにさへ、これほど大騷ぎをするのである。世間の女の虛榮に囚はれてゐることは、まだ是れ處ではないのである。而かも亭主は更に一層豪奢を極め、島原の全盛

を二人まで毎日のやうに荷ひ買ひをすると云ふ有樣。偶ま何處やらの寺へお參りをするとか云つて、鹿爪らしく供の者に肩衣は持たせて出掛けるが、どうやら脇へ外るらしい樣子が見えるのである。

やがて夜明け近くなつた時に、彼の横町の婆さんの家の雨戸を窃かに叩いて、

『せんで御座んす。』

と云つたかと思ふと、いきなり風呂敷包みを一つ内へ投げ入

れて、そゝくさ歸つて行つた者がある。明くれば約束の八月十一日なので、おせんが旅立ちの荷物を運んで來たのである。

婆さんは燈を付けて見ると、一匁つなぎの錢が五つ、こま銀が十八匁もあらうか、白米が三升五合ほど、鰹節が一本、守袋に二つ櫛、染め分けの抱へ帶、銀すゝ竹の袷、扇流しの浴衣、裏の破れかけた木綿足袋、凡そこれ等の品が雜然と入り交つてゐる中から、草鞋の紐がしどけなく這つてゐた。更に傍の加賀笠に目を遣ると、天滿堀川といふ字が書き附けてあるので、こ

んなことは入りもしないと、婆さんは汚れぬやうに墨を落してゐた。折から又誰か門口へ近づく氣勢がして、

『かゝ樣、お先へ參ります。』

と聲を掛けて行き過ぎた。おせんを慕うてゐる桶屋である。

間もなくおせんが拔け出して來ると、婆さんは風呂敷包を提げて先に立ちながら、

『私も太儀ではあるが、役目からぢや、伊勢まで見届けて上げようわえ。』

と云ふのである。

おせんは厭な顔して、

『年よられてからの長の道は、とても難儀で御座んせうに依つて、私をその人に引き合せて下さつたら、ともかくも伏見から船でお下りなされたが好御座んせう。』

と、はや卷き心になつてゐる。

さう云ふ内にも心が急くので、二人は道を急いで行くと、ちやうど京橋を渡りかけた時に、ふと朋輩の久七といふ若い男に

見付かつた。久七は今朝早く用事があつて出かけて行つた歸りである。

『おや〳〵、伊勢參りですかえ。私もつねづね御參宮を心掛けてゐたのぢやが、願うてもない好い道づれぢや。荷物は私が持ちませう。幸ひと小遣錢ぐらゐは持ち合はすによつて、不自由な目は見せますまい。』

斯う云ふ言葉から察して見れば、大かた此の久七もおせんに下心があるのであらう。

婆さんは聞くからに色を變へた。

『女子に男の道づれなんぞ、滅相もない！　人が見たら、よもや只とは云ひますまい。とり分けこちらの神樣は、左樣の事は堅くお嫌ひなところから、世間に恥を晒した人のことは、隨分見たり聞いたりして居りまする。決してお出でになるではありませぬぞえ。』

『これは思ひもよらぬ事をお云ひやる。なんのおせんどのに心をかけてゐるものか、只だ〳〵信心からの思ひ立ですぞえ。喃

おかゝ殿、心だに誠の道に叶ひなばよ、祈らずとても神樣が守つて下さるわえ。どうであらう、おせん殿の情次第で、どこまでなりと行て、戻りには京へ寄つて、四五日も慰めましよ。高尾の紅葉も丁度見頃、嵯峨の松茸もさかりぢや。川原町に旦那の定宿はあるが、そこは何かと面倒ぢやに依つて、三條の西詰あたりにちんまりとした座敷を借りて、おかゝ殿には六條まゐりをさせましよぞえ。』

久七はもう獨りで極めてしまつた。

やう〳〵秋の日も山崎に傾き、淀川堤の松蔭に差蒐ると、怒つたやうな顔つきをした一人の男が、人でも待つらしく丸葉柳の根に腰かけてゐた。近くなつてから見ると、それは約束して置いた桶屋であつた。不首尾を婆さんの目まぜで知つたので、桶屋は一同の跡になり先になりして跟いて行つた。

やがて婆さんは桶屋に言葉をかけた。

『こなたもお伊勢參りの衆らしいが、而もお一人ですねえ。お見かけ申したところ、どうやら氣立てもお宜しさうぢや。私等

と一つに旅籠を取らうでありませぬか。』

桶屋はひどく悦んだ。

『旅は人の情ぢやとか申します。萬事お願ひ致します。』

この樣子を見て、不審に思つたのは久七であつた。どうも合點が行かぬといふ顔つきをして、

『どこのお方とも知れぬ人を、とり分け女子の連れにするとは思ひも寄らぬ。』

と、故障を挾んだ。

すると婆さんは委細を呑み込んでゐるらしい調子で云つた。

『神は見通しぢや。おせん殿には此方といふ兵が附いておゐでぢやものを。なんの事がありますかえ。』

出立した其の日から同じ宿に泊りながら、桶屋とおせんとは互ひに思惑を語り合ふことが出來なかつた。久七といふ邪魔者が始終何かに氣を附けて、間の戸障子を一つにはづし、据風呂に這入つても首だけ出して覗いてゐ、さて日が暮れて寢る段になつても、四人が一緒に枕を並べると云つた風であつた。

いづれも參宮するのが目的ではないので、内宮や二見へも出掛けるでなく、外宮へのみ一寸詣つて、ほんの土産の印ばかりに、お祓串と若布とを買ひ調へ、道中兩方睨み合ひで、何の仔細もなくして京都まで來て、久七が才覺した宿に着いた。すると桶屋は今まで立替へて置いて貰つた金高を目の子算用にして取り出して、

『この程は何分御厄介になりまして。』

と、一通りの挨拶をして、そのまゝ別れて行つた。

久七は今は天下を取つたやうな氣になつて、それ〴〵の土產物を金を惜まず買つてやつた。やがて日が暮れると、久七は烏丸の側とかの知人を尋ねて行つて、暫らく歸つて來なかつたので、その間に婆さんはおせんを連れて淸水樣へ參詣して來ると云つて、大急ぎで宿を出た。

祇園町の仕出し辨當屋の前まで來た時、表の簾に錐と鋸とを目印に描いて張り付けてあるのを發見した。二人はその內へ這入つて、二階へ上ると、先程の桶屋が待ち構へてゐたのであるやがておせん桶屋の夫婦約束の杯事が濟むと、婆さんは直ぐに下へ降りて、

『こゝは偖て〴〵水の好いこと！』

と云ひながら、止め度なく煎茶を飲んで、暫らくは座を立たうともしなかつた。

桶屋は翌日の晝船で大阪へ下ることに極めた。

婆さんとおせんとは宿に歸ると、俄かに今から歸らうと云ひ出した。久七は驚いた樣子で、是非二三日は都見物をして行か

うと止めたけれども、どうしても聞き入れられなかつた。

『いや〳〵、奥様におかしく思はれましても如何ぢやに依つて……。』

女二人は斯う云つて先に立つた。

『したが、この風呂敷包みは大きうて太儀ゆゑ、久七どの、一つお頼みしますぞえ。』

と、女たちは頼んだが、

『急に肩が痛うて……。』

とばかり、久七はもうそんな物には手を觸れようともしなかつた。それから途中で掛茶屋に休んでも、茶代は銘々拂ひといふことにして歸路に着いた。

▣こけらは胸の燒付さら世帶

『參るならば參ると、内へ知らして參れば、通し駕籠か乘掛で參らせてやるに、物ずきな、拔けまゐりなんぞして！　全體この土産物は何處の錢で買うて來たのぞ？　夫婦つれ立つて行つ

ても、その、その、そんな事はしやせぬぞえ。やうも〳〵二人づれで下向したことぢや！　せんは女の身であれば、きつと久七が勸めたものに相違ない。』

奥樣の腹立ちは非常なもので、久七が何と云ひ譯しても駄目であつた。罪なくして疑はれた結果、遂に久七は九月五日の出替りを待たずに暇を貰つた。そして其の後は北濱の備前屋といふ紙問屋に年季を重ねたが、蓮葉な女を女房にして、今は柳小路あたりで鮨屋をしてゐて、おせんの事なぞはもう疾くに忘れ

てしまつた樣子である。とかく人は皆な移り氣なものである。

〈おせんは別に變りもなく奉公してゐたが、桶屋の假の情を忘れかね、心も空に浮々となつて、晝夜の辨へもなく、いつか身を捨てゝ女に極まつた身だしなみをするでもなく、次第に見苦しく窶れて來た。丁度その時分に、鷄が夜鳴きをしたり、大釜の底が腐つて拔けたり、味噌の味が變つたり、或ひはまた神鳴が內藏の軒端に落ちたり、何かと好くない事が續いた。こんな事は皆な自然の道理で、かうも不思議とするほどの事ではない

のに、妙に氣に病んでゐる矢先き、誰が云ふともなく、

『おせんを焦れてゐる男の執心は今に止まぬげな。そしてその男といふのは桶屋ぢやげな。』

と噂せられた。

親方はそれを耳にすると、何とかしてその男をおせんに貰つてやらうと思ひ立つた。そこで横町の婆さんを呼んで、窃かに相談をして見た。

『さあ。つねづねおせんどのゝ申されるには、男を持つとも職

人衆は厭ぢやと云ふことゆゑ、どうも危ないもので御座りますぞえな。』

と、婆さんが云つた。

『それは不都合な物好みぢや。何商賣であらうとも、世渡りさへ出來れば結構でないか！』

親方はおせんにも樣々と意見して、とにかく桶屋との縁談を調へ、間もなく吉日を選んで合衾の式を擧げさせた。この時親分からは、二番の木地長持一棹、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の

狹箱一つ、奥樣の着おろしの小袖二枚、夜着に布團、晒縁の蚊帳、昔染めの被衣など、總べて二十三點、それに銀二百目を添へて祝ひに贈つた。

相生もよく、爲合せもよく、夫は正直の頭を傾けて、細工をすれば、女はふしかね染めの縞を織り習つて、明け暮れ仲よく稼ぐので、盆前や大晦日になつたと云つても、遣り繰りの心配もなく、世間並みに世を渡つた。而かもおせんは殊更ら男を大切にして、雪の日や風の吹く時は飯櫃を包み、夏は枕に風をや

ることを怠らず、留守には宵から門口を締めて、外の者には目も呉れなかつた。その内、可愛い子供を二人まで設けて、夫婦の仲はます〳〵睦ましかつた。

木屑の杉やうじ一寸先の命

來る十六日に無菜の御齋申上たく候。御來駕に於いては辱く奉存候

麹屋長左衛門

町衆　次第不同

月日の立つ事はまるで夢まぼろしのやうである。父親が亡くなられてから早や五十年忌になつたが、自分が今まで長らへて此の法會を營むことが出來るのは悦ばしい限りである。古人の云ひ傳へに、五十年忌になれば朝は精進にして晩は酒肴で陽氣に騒ぎ、それで年忌弔ひは切り上げて好いと云はれてゐる。ちやうど今度がその最後だ――と云ふので、少しの物入りも厭はずして萬事その用意をするので、近所の出入りの女房たちが集

まつて何かと手傳ひをした。

桶屋の女房のおせんも、日頃この家から近しくして貰つてゐるといふので、何なり勝手向きの手助けをさせてほしいと云つて來た。そこで麹屋では、不斷からおせんが機轉が利くらしく見えるところから、

『そんなら其方は、納戸にいろ〳〵取散らかつてゐる菓子を縁高へ組付けて貰ひませう。』

と頼んだ。

おせんは早速納戸へ行つて、配合を思案しながら、饅頭、御所柿、唐ぐるみ、落雁、榧、杉やうじと云つた風な物をあらまし取合せた。その時、そこの主人の長左衛門が棚から重ね鉢を卸さうとして、おせんの頭へ取り落して、綺麗な結ひ立ての髪を臺なしに壞してしまつた。主人がひどく氣の毒がると、おせんは少しも氣にしないで、

『なんの、旦那樣、これしきの事！』

と、ぐる〳〵卷にして、臺所へ出た。

その姿を麹屋の内儀が見咎めて、氣を廻した。

『そなたの髪は今の先まで美しかつたが、納戸で俄に解けたと云ふのは、どうした譯ぢやえ。』

と、皮肉に云つた。

おせんは何も身に覺えのないことなので、

『旦那樣が棚から重ね鉢を取り落されましたので、こんなになりましたので御座います。』

と、物靜かに答へた。

内儀は、併しながら、それを更に合點しなかつた。

『さうぢやとも、晝間ぢやとて棚から鉢の落ちることもあらうわえな。いたづらな重ね鉢め！　きつう當れば、髪は解けるものぢや。よい年をして、親の吊ひ最中に粗忽な人……』

と、果ては癇癪を起して、折角爲上げた御馳走皿を投げ出すやら、酢にあて粉にあて、一日この事を云ひやまないので、しまひには人も氣が付いて、ひどく興を覺ました。こんな女房を持つた男こそ、好い災難である。

おせんは迷惑ながら默つて聞き流してゐたが、さて考へて見ると、如何にも内儀の心が憎々しい。どうせ濡れた袂であつて見れば、この上はあの女に鼻を明かせてやらうと思ひ立つた。さう決心して殊更ら長左衛門に親し氣にしてゐる内に、何時かこの心が變つて行つた。

貞享二年正月二十二日の夜のことである。春の慰みも更けてやがて、歸らうとすると、麴屋の長左衛門が家まで付いて來た。桶屋は燈の消えかゝつたのも知らずに、晝の疲れでぐつす

り寝入つてゐたが、何やら門口で人の氣勢がするのに目を覺まして、

『誰ぢやえ？』

と、寝ぼけ聲を張り上げて叫んだ。

そして門口まで起きて出て見ると、可愛や女房のおせんが商賣道具の前鉋で心臓を差し貫いて殪れてゐた。

やがて其の死骸も長左衛門も同じ罪科の下に處せられて、野晒しに遭つた。

五人女卷の三

◉すがたの關守

天和二年のことである。人の心も浮き立つ春やうやく深くなつて、安井の藤は今を紫の雲の如く、松さへ色を失ひ、黄昏の人立ちは非常なものであつた。

その頃、洛中に鳴り渡つた道樂仲間の四天王があつた。遊び

振りなら、身なりなら、人に勝れて目立ち、親ゆづりの財産のあるに委せて、元日から大晦日まで一日として花柳の巷に遊ばない日はなかつた。その日も此の一座は樣々の遊興を爲盡くした揚句、晝芝居の撥ね過ぎから松屋といふ料理屋に御腰を据ゑて、さて何か目先の變つた趣向をと云ふので、

『今日ほど綺麗な地女の出たことはない。中には拙等のお目に止まらうと云ふ品もないではあるまい。』

と、氣の利いた役者の一人を目利頭にして、夕暮れの花見が

へりの女を待ち受けることにした。

併し大抵は女中乘物を打たせて行くので、心惜くも中が見えない。ぞろ〳〵歩きの一團の中には、厭なといふ程の女もないが、さうかと云つてぞつとする程の者もゐない。

『兎も角も、好い女子ばかり書きとめるとしよう。』

と云つて、硯箱を取りよせた。

ふと見ると、年の頃は三十四五ぐらゐでもあらうか、首節のすつきりとした、目の張りの凛として額の生え際の自然に綺麗

な、鼻は心持高く過ぎるが、それとても我慢の出來るほどの女ぶりである。下は白羽二重の引返し、中は淺黄羽二重の引返し上は樺つめの引返し、模樣は肉筆で描かせて、左の袖には兼行法師が獨り燈の下に古い書物か何かを見てゐると云つた風な圖案の凝り方、帶は敷瓦の折天鵞絨で、御所かづきの結びやう。薄色の絹足袋を穿いた足を、三節緒の雪駄に乗せて、音も立てずに歩いて、而かも氣取つたらしくは見えない腰の据わりである。——あんな女の亭主こそ果報者だと思つて見た時、何か供

の者に物を云はうとして口を開けた機みに、下齒が一枚脱けてゐたので、見劣りがした。

間もなく其の跡から、十五——六七にはまだ成るまいと思はれる娘が、左の方には母親らしい年増に、右の方には墨染の衣を着た尼僧に附き添はれ、更に多勢の下女や、下男に侍かれて大事にかけて遣つて來た。さては緣付き前かと思つて見ると、眉を落して鐵漿をつけてゐた。顏立ちは可愛らしい丸顏で、目には聰明の色が現はれ、耳の付きやうはしほらしく、手足の指

はふつくらとした色白の薄皮である。それに着物の着こなしがひどく好い。下には黄無垢、中には紫の地なし鹿の子、上には鼠繻子に百羽雀のきり付けを着け、段染めの一幅帶に胸あげ掛けて身ぶり好く、塗りがさに千筋小撚の緒を付けた優しさ！

これはと思つて好く見ると、横顔に七分あまりの打疵がある。而かもそれが生れつきのものとは思はれないのである。

『さぞ其の時の抱き乳母を恨むことであらうて！』

と、一同は大笑ひをして遣り過ごした。

今度は二十一二になる女が木綿の手織り縞を着て、繼ぎだらけの裏を風に吹き返されて遣つて來た。帶は羽織の古いのを仕立て直したものらしく物哀れにも細く、擦れ古びた紫の皮足袋に、片々ちんばの奈良草履を穿いてゐる。髪は何時櫛の齒を入れたものか、しどけなく亂れたのを、無造作にからげて、何の氣取るでもなく一向平氣で歩いてゐるのである。それでゐて、顏かたちに何一つ不足もなく、世にはこれほどの美人があるかと思はれるほどである。一同は何れも見惚れてしまつて、

『あの女に綺麗な衣裳を着けさせたら、それこそ人の命を取らうも知れぬぞえ。まゝにならぬは貧富の差かな。』

と、哀れになつて、そつと其の女の跡から人を附けさせて見ると、誓願寺通りの場末の煙草切りの女といふ事が知れた。

その跡へ來たのは二十七八の女である。その仕出しの華奢さ加減と云つたらない！　三つ重ねにした黒羽二重の小袖に裾取りの紅絹裏、金のかくし紋。唐織寄縞の大幅帶を前に結び、髪は投げ島田に平元結を懸けて、對の挿し櫛にはきかけの置き手

拭、吉彌笠に四色の紐を付けて顔自慢に淺く被り、抜き足中びねりと云ふ歩きぶりである。

『これ〳〵、これぢや！　默つて〳〵。』

と、一同は鳴りを鎮めて待つてゐると、三人つれた下女に一人づゝ子供を抱かせてゐるのである。恐らく年子でゞもあらう跡から子供が、

『母か樣、〳〵。』

と呼ぶのであるが、前の女は聞えない振をして行くのである

『さうよ、あの身にしては我が子ながら定めし厭であらうわえ女はやはり生まぬ内が花ぞえなあ。……』

一同は其の女が無常を感じさせるほど冷かして笑つた。

そこへ、乘り物豊かに遣つて來た女がある。年の頃はまだ十三か四ぐらゐかと思はれる。梳きながした髪の先を少し折り戻して、眞紅の絹で疊み結び、若衆のするやうに分前髪にして金元結で結はせ、綺麗な五分櫛を挿した姿は、一目見て恍惚とするばかりである。白繻子に墨形の肌着をつけて、上は玉虫色の

繻子に孔雀の切付模様、それが見え透くやうに上から唐糸の網を掛け、さても氣取つた小袖に十二色の疊み帶、素足に帋緒の履物、浮世笠をあとから持たせて、藤の花の八房つらなつたのを翳し、見ぬ人のためにと云はぬばかりの風情である。一同が今朝から見盡した多くの美人たちも、この耀くばかりの少女の前には悉く姿を搔き消してしまつた。あまりに床しいので、その人の名を尋ねて見ると、室町のさる方の息女で、今小町といふのだとばかり、云ひ捨てたまゝ行き過ぎてしまつた。

圖してやられた枕の夢

この四天王の一人に、貴顯の覺えも目出たい大經師の何某といふ男があつて、久しく獨身生活を送つてゐた。男世帶も氣樂なものではあるが、さて連れ添ふ者のない夕暮は一しほ淋しかつた。都なれや、物好きな女も幾らもあつたが、銖の外縹緻好みなところから、一向意に叶ふ者がなかつた。然るに、ふと耳にしたのは、今小町と云ふ娘の噂である。男は好奇心に驅られ

るまゝに尋ねて行つて見ると、いつぞやの春、四條の旗亭で遊び仲間と花見もどりの女たちの品さだめをした時に、藤の花もたゆ氣に翳してゐた當年の美少女であつた。男は一目見ると、もう矢も楯も溜まらなくなつた。

當時、下立賣烏丸上る町に、『しやべりのなる』と云つて評判の媒介人があつた。男はそれに懇願して、吉日を選んで今小町を妻に迎へた。今小町は名をおさんと云つた。花の夕、月の曙男は外を眺めもやらずに愛を傾ければ、おさんは明け暮れ夫大

事に立ち働き、家は次第に榮えて行つた。

それから三年ほど立つた時のことである。夫は所用のため江戸へ行かねばならぬことになつたので、おさんの親里へ暇乞ひに行つた。すると親の方では、留守中の娘の身の上を思ひやつて、店の方を捌かせて旁たおさんの相談相手にもさせようと云ふ心から、長年手許に使つてゐた茂右衛門といふ若者を聟の家へ遣つた。この男は正直一途な律義者で、若い身空で見榮を飾らうとするでもなく、只だもう十露盤を枕に夢にも金儲けの工

夫に沒頭してゐる男であつた。

折から秋の夜嵐が烈しくなつた時分なので、茂右衛門は身の養生に灸を据ゑようと思ひ立つた。丁度その家の腰元にりんといふ女があつて、それが上手に灸を据ゑるので、茂右衛門はこの女に頼んだ。りんは何心なく茂右衛門の灸を据ゑてゐる内にいつかこの男を慕はしく思ふようになつた。

女の思ひは日に増し募つて、物思ひに耽る時が多くなると、すぐに内の者の噂に立つて、果てはおさんの耳にさへ這入るや

うになつた。けれどもりんはそれが爲めに思ひ止まることは出來なかつた。

りんは貧しい家に育つて、讀み書きの道をまるで知らなかつたので、思ふ男に手帋を遣ることも出來ないのを今更ら悲しく思つた。店の小僧がにじり書を見るにつけても羨ましさは一層であるので、ひそかにこれに代筆を賴まうとすると、早くも小僧は茂右衛門よりも先きに我が物にしようとするのであつた。

やる瀨ない日を送つてゐる內に、いつか時雨の降る時分にな

つた。おさんは江戸へ行つてゐる夫へ便りの手紙を認めた序に

『りん、そなたにも好い物を書いて上げようかえ。』

と云つて、水莖の跡美はしくさら〳〵と書いて、『茂のじ樣まゐる——身より』とばかり引き結んで、投げてやつた。

りんの嬉しさは譬へるに物もなかつた。何かの機に早くそれを手渡ししようと待ち構へてゐると、或る時店から煙草の火を吳れと云つて呼んだ。その時、折よくもあたりには人がゐなかつたので、りんは丁度よい折と豫てのものを渡した。

茂右衛門はまさか奥様のおさんの代筆であらうなぞとは少しも氣が付かなかつたので、りんの心根をいぢらしく思つた。そこで笑談まじりに返事を書いて、りんに渡した。りんは素より讀みかねたので、機嫌の好い折を見計らつて、奥様に見せた。

その返事には、こんな事が書いてあつた。――

『思召しによりて、思ひもよらぬ御傳へ。この方も若い者には候へども、契り重なり候へば、取揚婆がむづかしく候。さりながら着物、羽織、風呂錢、身だしなみの事どもを、

其方から賃をお書きなされ候はゞ、いや乍ら恇へてもやるべし。――』

この無愛想な手紙を讀むと、おさんは自分等女性に對する淡い侮辱と、腰元のりんに對する同情とを、心に感じた。

『まあ〳〵、この憎らしい文句わいの！　世界に男の日照がありはすまいし、りんぢやとて一人前の生れ付きぢや、茂右衛門ぐらゐの男に、さう〳〵未練をかけることはないわえ。』

反抗の念はやがて復讐に變じた。この上は飽くまでも茂右衛

門を飜弄してやらうと云ふので、おさんは更に腕に撚りをかけて誘惑の手紙を認めて、男に送らせた。

茂右衛門は忽ち術中に陥つた。そして前非を悔いると共に、今度は眞心を籠めた返事を認めて、逢ひ逢ふ日まで約束して來た。おさんを始め、召使の女たちは、何れも冷笑の凱歌を奏した。そして調子に乘り過ぎた餘り、云つて來た約束の其の晩に更におさん自身が腰元のりんに扮して、茂右衛門を愚弄しようと掛つた。

さもあれ、この企ては餘りに無暴であつた。おりんの夢にも知らない内に、運命の神はいたづらをした。始めて意識を持つた二人は空怕ろしかつた。……

この思ひ掛けない機會から、二人の間には新たに不思議な思ひが成り立つた。

人をはめたる潮

世に戀ほど濃かな間柄のものはないと、源氏物語にも書いて

ある。

折から石山寺の開帳といふので、都の人たちは東山の櫻を餘所に、袖をつらねて參詣に出て來た。大部分は當世風の女づれであるが、どの顏にも信仰の影が見えるでなく、いづれも衣裳くらべの姿自慢に來たと云つた風な樣子である。これを見て觀音樣もさぞ可笑しいことであらう。その時おさんも茂右衛門の外に供を連れてこの寺に詣でたが、世を忍ぶ仲の二人の身には又何時つれ立つてこゝ等の景色が見られるか分からないといふ

ので、勢田から船を傭うて浪穩やかな湖の上を渡りながら、龍燈のあがる黃昏ごろに漸く白髭神社へ着いた。

おさんはそこの社に詣でると、ふと自分の身の上が心に浮んで、急に悲しくなつた。考へて見ると、世に長らへれば長らへるほど苦勞が增すやうに思はれる。いつその事、今この湖に身を投げて、未來の國で心置きない方が、二人に取つて何れだけ幸福か知れない。——斯うした遣る瀨ない心持ちを、おさんは茂右衛門に打明けた。

『何も惜い命ではないが、死んだ先きは何うなる事やら知れたものでない。それよりか、私に好い考へがある。――と云ふのは、二人が都へ宛てた書置きを殘した上で、身を投げたと人に云ひ觸れさせて、こつそり此所を立ち退くのぢや。そして譬へ何のやうな國里へ行つてなりと、年月を送らうではないか。』

茂右衛門のこの申出を聞くと、おさんはひどく悅んだ。

『私も家を出てから、さう云ふ氣を起さぬでもありませぬでしたぞえ。』

萬一の用意にもとて、五百兩といふ金まで手荷物の中へ入れて來たと、おさんが打ち明けた。

『ほう。それこそ何よりの世渡りの元手ぢや。いよ〳〵此處から忍ぶことにしよう。』

二人は遂に決心して、書置を認めた――。道ならぬ道に天命遁れず、もはや身の置き處もなくなつたので、今月今日うき世の別れをすると云ふ意味を誠らしく書いた。そしておさんは肌の守に黑髮の末を切り添へ、茂右衛門はよく人の見覺えのある

一尺七寸の脇差を跡に殘し、更に二人の上着、女の草履、男の雪駄まで、細かく遺殘品に氣を付けて、湖の岸の柳の根元へ置き捨てた。それから水練の巧みな漁士を二人ひそかに傭つて、十分に金を握らせてあらましの樣子を打明けると、漁士たちは心やすく聞き入れて呉れた。

やがて夜が更た時、待ち構へてゐたおさんと茂右衛門とはそれ〴〵身支度をしてしまふと、泊つた家の雨戸を明けかけて置いて、さて家の者を搖り起しながら、

『思ふ仔細があるによつて、私たちは今死んでしまひます。』

と云ふが早いか、二人は表へ飛び出した。

間もなく、闇の中の岩の上で念佛の聲が幽かに聞えたかと思ふ途端に、二人とも身を投げたらしい水の音がした。

『それッ、身投げぢや！』

と、跡から追つ駈けて出た人々が大騷ぎをしてゐる内に、茂右衛門は逸早くおさんを負つて、闇の中へ立ち退いて行つた。

賴まれて岩から飛び込んだ漁士たちは、浪の下を潛り拔けて、

人の氣づかぬ岸へこつそり上つた。

誰よりも驚いたのは、おさんに連れられて來た供の者であつた。時を移さず漁士を頼んで色々と捜させたが、更に手掛りがない。その内夜も明けたので、泣く〳〵形見の品々を取り纒めて、京都へ歸つて、家の者に一分始終の物語をした。家の者は世間體を憚つて、堅く口止めをしたが、耳の早い世間では何時の間にか聞き傳へて、噂は忽ち廣まつた。

▣小判知らぬ休み茶屋

二人はやがて丹波越えをすることになつた。茂右衛門はおさんの手を引きながら、次第に峰高く登つて行つたが、越し方を顧れば如何にも怕ろしく、生きながら死んだやうな氣になるのである。而かも路は愈よ峻しくなつて、杣人の足あとさへ見えない。おさんは羸弱い女の身であるので、やつれ方も一層烈しく、息も絶え〳〵になつて、顏色が變つて來た。茂右衛門は驚

いて、岩もる雫を木の葉に受けて喉を潤しながら、様々に介抱の手を盡すけれども、次第に脈も弱つて、今にも死にさうに思はれた。さうかと云つて、藥の用意もないので、今は運を天に任せるより外なかつた。

茂右衛門は魂も身に添はぬ樣子でやきもきしながら、おさんの耳元へ口を寄せて、

『今すこし先まで行けば、知つた者のある村があるによつて、さうしたら今の苦勞も一つ話になることぢやぞえ。さ、さ、今

すこしの辛棒ぢや。……』

と、それでも大丈夫らしく囁いた。

この事がおさんの耳に通じると、

『それぢや命にかへての男ぢやものを……。』

と、急に氣を取直した。

この樣子を見て、茂右衛門の元氣も百倍した。そこでおさんを背に負うて山を下りて、とある村まで來た。こゝは京都へ行く街道筋にあたつてゐるので、馬の行き違へるほどの道もあつ

た。茸屋の軒には諸白を賣る看板も見え、店には埃を被つて白くなつた餅もあり、少しは見馴れた都めいて來た。これに力を得て、暫らく休むことが出來た嬉しさに、茶店の亭主に金子一兩をはづんでやると、猫に傘を見せたやうに亭主は厭な顔つきをして、

『お茶代を置いて行かつしやれい。』

と云つた。京から僅か十五里ほどしか離れてゐないのに、小判といふものを知らない村があるのかと思ふと、可笑しくなつ

た。

それから柏原といふ處へ行つて、絶えて久しく訪づれなかつだ茂右衛門の乳母の内を尋ねた。乳母は昔の馴染み甲斐だけに色々もてなし、その夜は亡き父茂助の事ばかり云ひ出して、涙ばなしに夜を更かした。

あくる日になると、乳母は始めて綺麗なおさんの姿に氣が付いたらしく、不思議の目を見張つて、

『どう云ふお方樣で御座りますえ？』

と。茂右衛門に尋ねた。

茂右衛門はまだ其處までは考へてゐなかつたので、はたと當惑した。そこで苦しまぎれに何の顧慮もせずに、

『お前は知るまいが、これは私の妹ぢや。長らく御所方に宮仕へをしてゐたのぢやが、何がさて物堅い都ずまひ、氣苦勞も一段と多いので、いつその事安氣な里ずまひがしたいと云ふのぢや。それでかういふ閑靜な山家に似合ひの緣もなからうかと思うて、身を引かせて連れて來たのぢや。金も二百兩ばかり溜めてゐるぞえな。』

と、口から出まかせの事を云つて、お茶を濁した。

どこへ行つても慾の世の中である。乳母は早くも心に頷いた

『それは願うたり叶うたりぢや。私の悴がまだ極まつた女房もなく獨り身で居りまする。そなたも滿更の他人でないによつてどうぞあれに下さりませ。』

と乳母が云つた。

おさんは驚いて、窃かに涙を流しながら、この先はどうなる

事であらうかと、小さい胸を痛めてゐた。そこへ、夜更けてから、その悴といふ男が歸つて來た。おさんは一目見て身ぶるひした。その樣子はと云ふと、雲つくばかりの大男で、髮の毛は唐獅子のやうに縮みあがり、髭は熊かと思ふばかりである。血走つた眼はぎら〳〵と耀き、手や足は節くれ立つた松の木そのまゝである。山着を着た上から藤繩の組帶をして、鐵砲に切火繩、かますに兎や狸などを入れてゐる處から察しると、獵師を渡世としてゐるらしい。名を聞けば、岩飛の是太郎といふのだ

とか、村でも評判の惡黨なのである。

岩飛の是太郎は母親から委細の樣子を聞くと、無恰好な相好を和らげて悅んだ。

『善は急げぢや。今夜の內に何もかも片付けよう。』

と云つて、是太郎は鬢鏡を取り出して顏を寫した。この男にも優しさはあつたのである。

おさんの悲しげな樣子を見るにつけ、茂右衛門の當惑は一層增した。何の氣もなしにお茶を濁さうとして云つた出鱈目がも

う取返しの付かぬ事になつたのである。何も因果である。既に近江の湖で死んでしまつた分にしてある命を長らへようとした處で、天は道して呉れないのである――斯う思ひ諦めて、茂右衛門は脇差を取り寄せて立ち上るのを、おさんは靜かに止めて

『さりとは氣短な！　樣々な分別があるによつて、夜があけてから此處を立ち退きませう。まあ〳〵、それまで萬事私に任せて下さいのう……。』

と、何か思ひ當る事でもあるらしく云つて、茂右衛門の氣を

落着けさせた。

併しおさんは何の屈託もない顏をして、快く祝言の杯を取り交して、さて斯う云つた。

『わたくしは世の人の何よりもお嫌ひになる丙午で御座りますぞえ。』

『ひのえ午ぢや？』と是太郎は事もなげに問ひ返した。『たとへ丙猫でも、ひのえ狼でも、そのやうな事は一向構はぬ。己は青蜥蜴が何より好きで、やたらにそれを喰うてさへ死なぬ命ぢや

今年二十八になるまで虫腹一つ起つたこともない。茂右衛門どのも、こいつだけは遣つて見さつしやれ。女房どもは上方育ちで、物に柔らか過ぎるのが些と氣に入らぬが、ま、ま、知つた仲だてに諦めようわえ。』

是太郎は斯う云ひ放つたまゝ、いきなり其の場へ倒れて寢てしまつた。

悲しい中にも可笑しさはあつた。おさんと茂右衛門とは是太郎親子が寢入つたのを見すまして、再び此處を立ち退いた。

やがて日數を經て丹後路に入つて、切戸の文珠堂で通夜をして、うつら〳〵と眠つてゐると、夜中頃になつて、あらたかな靈夢を見た。

『その方たちは世に比びなきいたづらをして、どこまでも逭れようとして居るが、無駄なことぢやぞよ。されども返らぬ昔ぢや。これから後、浮世の姿をやめて、惜いと思ふ黑髪を切つて出家となり、二人とも別れ別れに住んで、惡心を去つて菩提の道に這入つたなら、世間の者も命は助けて呉るであらうぞよ。』

といふ、あり難い夢の告げである。

茂右衛門はむら〳〵と反抗心が起つた。

『ふん。末々は何にならうとも構はしやるな。こちや是れが好きで、命にかへてまでやつてゐることぢやわいの。』

斯う云ひ放つたかと思ふと、目が覺めた。見れば橋立の松ふく風が颯々と音を立てゝゐるばかりであつた。

身の上の立聞

惡い事はとかく云ひたがらぬものである。博奕打は負けても漲り、廓がよひを止められて利口ぶる者はない。喧嘩師は引けを取つた譯をかくし、買ひ置きの商人は損の行くことを包まうとする。併しこれは皆な闇がりの犬の糞である。とりわけ可笑しいのは、淫奔な女房を持ち合はせた男で、これほど情ないものはない。

『おさん事も死んでしまひましては、頼りないことで御座ります。』

と、大經師の亭主は只だ壽命で女房が死んだやうに世間體を取り繕ろひ、愛を傾けた當時のことを思ひ出して憎さの加はる中にも、尙ほ僧侶を招じて菩提を弔ふことを忘れなかつた。おさんが遺愛の小袖も、今は旦那寺の旗天蓋となつて、無常の風に飜へるのを見れば、亭主の愁ひは新たになるのであつた。

然るに、又思へば、人間ほど大膽なものはない。丹後の奥に身を忍ばせた茂右衛門も、始めの内は闇の夜には門へも出ないほどの律義さであつたが、いつの間にか日蔭の身を忘れて、都

のことが懐かしく思はれて來た。そこで身を田舍者にやつして編笠を深く被り、おさんは村の者に預けて、用事もないのに京都へ上つて行つた。

敵を持つ身よりも尙ほ怕ろしい心持で道を辿りながら、廣澤のあたりまで來ると日が暮れ掛つた。岩に數散る白玉の鳴瀧の山を跡にして、案内を知るまゝに御室、北野と急いで、漸く町中へ這入ると、急にまた怖ぢ氣がして、十七夜の月に移る自分の影法師にも折々胸を冷しながら、住みなれた主人の家の側ま

で來て、ひそかに内の樣子に聞き耳を立てゝ見ると、店では若い者等が集まつて頭の恰好の品さだめや、木綿着物の仕立ぶりの穿鑿に餘念がない。

更に耳を澄まして聞いてゐると、何かの話の末に、とうゞ自分の事を云ひ出した。

『さても〳〵茂右衛門めは又とない美人を盜みをつたものぢやどうせ惜うない命、死んでも果報ぢや。』

と、誰かゞ云ふと、

『いかにも〳〵。一生の思出ぢや。』

と、相槌を打つ者がある。

さうかと思ふと、分別臭さうな聲をして、

『あの茂右衛門といふ奴は人間たる者の風上にも置ける奴ではない。御主人夫婦をたぶらかし居つて、昔から聞いた事もないやうな大惡人ぢや。』

と、道義を說いて憤慨する者があつた。

茂右衛門はその聲音から察して、思ひ當ることがあつた。

『たしか今のは大文字屋の喜助めの聲らしいが、哀れを知らずに何と云ふ憎々しい口の利き方をする奴であらう！　おのれには預り手形にして銀八十目の取り替へがあるのぢやぞ。今の言葉の代りに、おのれ糞、首を押へて取つてこますぞ！』

と、齒がみをして口惜がつたが、世を忍ぶ身には是非もない無念の胸をさすつてゐると、また一人が斯う云つた。

『茂右衛門は今に死なずに、どこぞ伊勢のあたりにおさん樣を連れてゐるといの。うまい事をしをる。』

これを聞くと、茂右衛門は身に顫ひが出て、俄かに寒む氣がして來たので、急ぎ足で立ち去つた。そして三條の旅籠屋に泊つて、風呂にも入らずに休んでしまつた。

あくる日になると、茂右衛門は都の名殘に四條川原を東山へ忍び〳〵に下つて行つた時、ふと藤田狂言の客を呼ぶ聲に足を止めた。歸つてからおさんの土產話しにもしようと思つて、人の目立たぬ所へ這入つて、不安な心を抱きながら見物してゐた折からその狂言といふのも人の娘を盜む處なのに氣味を惡がり

何氣なく脇を見ると、思ひ掛けなくもおさんの亭主が同じく見物の中に交つてゐるのに氣が附いた。茂右衛門は電氣にでも觸れたやうに、はつと思つた。そして玉なす冷汗をかきながら木戸口へ駈けて出るが早いか、一目散に丹後の村へ歸つた。それ以來、急に怖氣が付いて、京都のことは曖にも出さなかつた。

菊の節句が近づいて來ると、毎年丹波から栗商人が京都へ出た。その栗商人の一人が大經師の家に立寄つて、四方山の話の序に、

『こなたの御内儀樣はお見掛け申さぬが、どうなされたえ？』

と尋ねた。

折が惡かつたので、誰一人それに答へる者もなかつた。すると居合せた主人が苦い顏をして、

『くたばつて仕舞うたぞよ。』

と吐き出すやうに云つた。

『ほう！』と栗商人は驚いたやうに云つて、更に言葉を續けた

『さうぢやが、物には似た人もあるものぢやなあ。こゝの御内

儀様に微塵も違はぬ人が、しかも此處に御座つた若い衆と生寫しの人と、丹後の切戸あたりにゐるのを見掛けたがなあ。』

栗商人が斯う云ひ捨てゝ歸ると、亭主は聞き咎めて、人を遣つて様子を見させた。すると其の二人は紛れもなくおさんと茂右衛門とであることが分かつたので、更に身内の者を多勢やつて、二人を捕へさせた。

二人は白洲で様々の詮議を受けた上で、遂にその罪科は免れぬ事となつた。それと同時に、二人の仲の使をした玉といふ女

も召出されて、三人は同じく栗田口の露と消えた。それは九月二十二日の明け方のことであつたが、最後は毫も卑しくなかつたと噂せられた。そしてその名は、今も淺黄の小袖の面影を見るやうに、鮮かに世に殘つてゐるのである。

五人女卷の四

▣大節季はおもひの闇

師走の空は雲の足さへ迅く、はや押し詰まつた二十八日の夜半に、本郷の方に當つて火事が起つて、見る〳〵内に燃え擴がつた。

その火元近くに、八百屋八兵衛といふ由緒正しい商家があつ

た。この家にお七といふ一人の娘があつた。年は十六で、廣い江戸にも多く見ないほどの、評判の縹緻よしであつた。何しろ火元ちかくの事なので、取りあへず、お七は母親に附き添つて駒込の吉祥寺といふ旦那寺へ避難した。この寺には八百屋の内の者の外、多くの人達が難を避けて、住職の居間にも赤兒の鳴き聲が聞え、明くれば饒鉢を手水盥にし、お茶湯天目も假の飯椀となるほどの混雜を極めた。

夜嵐が凌ぎかねた時、寺の者の慈悲から貸して呉れた着物の

中に、黒羽二重の大振袖に梧と銀杏との並べ紋を置き、燃えるやうな紅絹裏を附けた、何か仔細のあるらしい小袖がまじつてゐた。ふと、お七はその小袖に焼け焦げがあるのを見出して、何となしに暗い心持になつた。

『誰か身分の貴いお方が早うお陰れにでもなつて、形見に置いておくのも辛いと云ふので、こゝのお寺へお上げになつたものでいもあるのか知ら？』

お七は様々に聯想をしてゐると、この相見ぬ人の身の上に無

常を感じて、愈よ心が沈んで來たので、母親の珠數袋から珠數を取り出して手に掛けて、口の内に題目を稱へながら後生を弔うてゐた。

その時、年の頃十六ばかりの容顔美しい一人の貴公子が銀の毛貫を片手にして、左の人差指にあるかなきかの刺が立つてゐるのが氣になるらしく、日暮れ方の障子を開けて、身をじらして立つてゐた。お七の母親はその樣子を見かねて、

『抜いて差上げませう。』

と云ひながら、側へ行つて、さてその毛貫を取つて暫らく工夫をして見たが、老の眼にはどうもはつきり分からないのである。

お七はその氣の毒さうな樣子を見て、自分なら明るい目で拔けるのに——とは思つたが、恥かしさに氣おくれがして近寄りかねてゐると、母親が呼んで、

『これをお拔き申してお上げなさい。』

と、嬉しくも云ひ付けられた。

お七は若い貴公子の手を取つて、造作もなく難儀を助けると貴公子はお七のふうはりとした其手を熟視て居た。お七も離れたくはなかつたが、母親が見てゐるので、どうにもならなかつた。その代り、別れしなに態とうつかりしたやうに毛貫を持つて來た。そしてそれを返しに行くも羞しかつた。この時から互ひにいひ得ぬ思ひがした。

お七の思ひはいや增すばかりで、ある時寺の者に何とはなく此の貴公子の素性を尋ねて見た。

『あのお方は小野川吉三郎様と申して、由緒正しい御浪人衆であるが、それは〳〵お人柄なお方ですぞえ。』

と、寺の者が云つた。

それを聞くと、お七の思ひは一層増した。その揚句、ひそかに思ひの丈けを人づてに書き綴つた。するとそれと入れ違ひに吉三郎が寄越した、玉章にも盡きぬ思ひが書いてあつた。

互ひに樂しい逢ふ瀨を待つてゐる内に、新玉の年の初めとなり、君がため若菜覕つた日も暮れて、九日、十日と過ぎ、十一

十二、十三、十四日となれば、はや松の内もお仕舞ひになつて二人は只だ胸を惱ますばかりであつた。

■虫出の神鳴も禪かきたる君様

十五日の夜半のことである。

『もし〳〵、柳原から參りましたものですが……。』

と叫びながら、門を叩く者がある。

寺の者は夢を驚かされて、更に耳を澄まして聞くと、

『米屋の八左衛門が長病で臥せつて居りましたところ、とうとう今晩おしまひになつたので御座ります。かねがね覺悟はしてゐた佛のことでありますので、夜の内に野邊送りを濟ませたいので御座ります。……』

出家の役であつて見れば、これを聞き捨てにする譯には行かないので、住職は多勢の僧侶を連れ從へて、雨の中を出かけて行つた。庫裏には七十餘りの庫裏婆さんと、十二三になる新發智と、それに赤犬が一匹——これだけが淋しく殘された。

折から、凄じい音を立てゝ神鳴が鳴り出した。

庫裏の者も客間の避難者たちも、はつと驚いた。中でも可笑しかつたのは庫裏婆さんで、そゝくさ年越しの煎豆を取り出して、天井のある小座敷へ駈け込んで小さくなつてしまつた。

母親は子を思ふ道に迷つて、

『あまり非道く鳴つて來たら、耳を塞ぐと好いよ。』

などゝ氣を付けた。

女の身としては到底も怕ろしくて溜まらないほどであつたが

それにも拘はらずお七は、

『まあ、人さんは何うして然う神鳴なんぞに怕いのでせう。私なぞは例へ落ちて來ても怕くはありませぬ。』

と、女だてらに强がりを云つた。なぜと云ふに、お七には今夜こそ吉三郎に逢ふべき絶好の機會だといふ下心があつたからである。

夜は次第に更けて、人はすつかり寢入つてしまつた。お七は時分を見計つて、ひそかに客間を忍び出た。……

雪の夜の情宿

お七の思ひは何時か母親に知られた。そしてお寺を引き拂つて歸つてからは、嚴重に監督して、娘を割いてしまつた。併しお七は下女の情をたのんで、絶えず吉三郎と手紙を往復して、心の内だけは互ひに知らせ合つてゐた。

ある日の夕暮のことである。板橋在の者だとかいふ一人の少年が、松露だの土筆のやうなものを手籠に入れて賣りに來たの

で、お七の家ではそれを買ひ取つた。その日は春ながら雪が降りやまなかつたので、少年は村まで歸るのをひどく辛さうに云つた。亭主も遂ひ可哀さうになつて、

『庭の隅ぐらゐでも好かつたら、そこに泊つて、夜が明けてからお歸り。』

と、云つた。

少年はひどく悅んだ。そして午蒡や大根の莚を片寄せ、竹の子笠で顏をかくし、腰簑で體を包んで、一夜を凌ぐことにした

併し夜風は枕に通ひ、土間は冷え上がつて來るので、今にも凍え死にをするかと思はれた。その時、お七の聲で、

『先ほどの在の子に、可哀さうゆゑお湯なとお上げよ。』

と云ふのが聞えた。

間もなく、梅といふ飯焚女が、茶碗にお湯を汲んで來て呉れた。

『有り難う御座います。』

と、少年は丁寧に禮を云つた。

やがて時刻が來たので、家の者はみな寢てしまつた。すゝ
八つの鐘の鳴る時――今の午前二時頃――表の戸を叩いて、
『只今よろこび遊ばしましたが、而かも和子樣で、旦那樣の御
機嫌で御座ります。』
と、頻りに呼ぶ者があつた。
『それは嬉しや！』
と云つて、主人夫婦は起きるが早いか、大急ぎで出て行つた
お七は兩親を送り出して、戸を締めたが、その歸りに、店の

土間に寢てゐる少年の身を思ひやつて、下女の手燭を待たせて
覗いて見た。少年はすや〳〵と寢入つてゐるらしい樣子である
お七は更に憐れさを增した。
『心持よう寢てますものを、その儘にしてお置きなされよ。』
と、下女の云ふのを聞えぬ振して、お七は少年に近づいた。
得ならぬ香のかをりが少年の肌から匂うた。お七は何心なく竹
の子笠を取り除けて見ると、氣高い其の横顏といひ、また年の
頃といひ、ひしひしと思ひ當ることがあるので、騷ぎ立つ胸の

働停を抑へて、更につく〳〵見れば、まがふ方なき吉三郎である！

『こりや何といふお姿で御座んすぞえ！』

と、忍び泣くのであつた。

吉三郎はお七と顔を見合せて、暫らくは物が云へなかつた。

『せめては其方を餘所ながらでも見たいと思うて、斯樣に姿を變へて來たのぢや。宵ほどからの憂き思ひ、察しあれ。』

と、吉三郎は始めからの辛苦を吃りながら話した。

『兎も角もこちらへお這入りなされてから、お怨みのほども聞きませうわいな。』

お七は衝と手を引かうとして驚いた。宵からの苦勞で吉三郎の體は痛んでゐたのである。やう〳〵下女と手を組んで舁き乘せて、自分の居間へ連れて來た。そして藥を飲ませるやら、撫でさするやらしてゐる内に、吉三郎の顔に少し微笑が浮かんで來た。

『まあ嬉しう御座んした。今夜は杯事して、心にある程のこと

を語り盡しませうぞえな！』

お七が斯う云つて悅んでゐるところへ、急に父親が歸つて來た。お七を肝を潰して、いきなり吉三郎を衣桁の蔭へ匿した。そして何氣ない風を裝ひながら、

『して、おはつ樣は親子ともお達者で御座んすかえ！』

と、云つた。

父親は大悅びである。

『一人の姪のことゆゑ、とやかく氣遣ひをしてゐたが、やれやれ、重荷を卸したわえ。』

それから時を移さず、祝ひの品の用意をと騷ぎ立てるので、そんな事は明日心靜かにしても晩くないからと云つて、家の者は止めたが、父親は聞き入ようともしなかつた。

『いや〳〵、斯樣の事は早いほど好いのぢや。』

と云つて、暫らく一人で忙しがつてゐた。その內、やつとの事で寢かせつけはしたが、さてお七の部屋とは襖一重のことなので、話し聲が漏れる恐れがあつた。そこでお七は硯箱を取り

よせて、行燈の影で思ひの丈を紙に寫して、吉三郎に示した。

吉三郎は直ぐに筆を執つて、それに答へた。斯うして夜もすがら互ひに書き語らひて、明け方近く別れた。

世に見納めの櫻

その後は相逢ふべき便りもなかつた。

口に出せない秘密を持つたお七は、毎日やる瀬ない物思ひの日を悶え送つた。

風の烈しい、ある日の夕暮のことである。お七は何時ぞやの火事に、寺へ避難した折の世間の騒ぎを、不圖思ひ出した。續いて吉三郎の面影が……。

お七の胸には、始めて企てた夜の、樂しい夢のやうな光景が甦へつて來た。お七はこの美くしい繪卷物に厭かず見惚れてゐたが、やがて此の不思議な動機は實にあの時の火事からであつたことに氣が附いた。そして此の偶然の發見が今の儚い身の上に思ひ合はされた時、お七の混亂した頭の中へ、或る暗示が颯

と閃いた。――お七は我を忘れて聯想の糸を手繰り覓めながら遂に怕ろしい陰謀を胸に描いたのである。

それから暫らく立つてからのこと、八百屋の家の隅から怪しい煙が颺つて、烈風に揉まれて、あたりへ擴がつた。

『火事だ！　火事だ！』

といふ叫び聲が、荒れ狂ふ風の間に聞えた。

あたりは忽ち大騒ぎとなつて、驚いた多勢の人々が次第に八百屋の家に駈け集まつた。幸ひにも火の手はまた然程あがつてゐなかつたので、大事に至らずして揉み消すことが出來た。併し此處に不審なのは、出火の原因であつた。家の者は素より、集まつた他の多勢の人々も頻りに穿鑿したが、どうも放火であるらしいのである。

人々は不安な氣に襲はれながら、更に四邊を捜つて見ると、怪しげな物影に娘のお七の姿を發見した。まさかとは思つたが念のためにお七を詮議して見た。然るに、意外にもこのお七が放火の犯人である事が分つた。お七は我が事の不成功に歸した

のを知つて、屑よく自白したのである。

お七は間もなく縄を受けた。そして明々白々の罪跡の下に、極刑が宣告せられた。

お七の生きた屍は、やがて江戸市中に晒し廻された。併しお七に取つては、何事も既に覺悟してゐた豫定の事實であつたので、目立つて體の窶れるやうなことはなかつた。而かもお七は是れまでのやうに毎日髪を結つて貰つて、綺麗な姿を壞さなかつた。

やがて花も散り〳〵になつて、時鳥血に啼く卯月の初め、いよ〳〵お七の火炙りの刑に處せられる日が來た。併しお七は少しも取り亂すやうなことがなく、ひたすら佛を念じて、刑場に向つた。

その殊勝な志が餘りにしをらしく、痛ましいので、手向け花にと云つて、遲れ咲きの櫻を一枝贈られた。お七はそれを詠めて、

世の哀れ春吹く風に名を殘し、おくれ櫻の今日散りし身は

と、辭世の歌を一首詠じた。

聞く人は一しほ痛ましさを增して、その姿を見送つた。

その日は、思ひなしか、入相の鐘が多く鳴るやうに思はれた丁度その時分に、お七は十七の春を名殘にして、鈴が森の刑場の煙と消えたのである。

通りすがりの旅人も、この哀れ深い物語を聞き傳へると、只は通らず、いづれも回向してその跡を弔つた。そしてお七がその最後の日に身に着けてゐた小袖の燃え殘つたきれ〴〵までも

世間の人に爭ひ拾はれて、長く物語の種となつた。

斯うしてお七は世間の噂の焦點となり、その命日々々には、未知の人でさへ樒を折つて刑場の跡を訪ふほどであつたのに、その契りを込めた若衆——吉三郎は、お七の最後の日は愚か、それから後にも、つひぞ一度も此處へ姿を見せなかつた。寄るほどの人はみな其の事を噂して不思議がつた。

一方、吉三郎自身は、過ぎし夜のあかぬ別れから此の方、只だ一心にお七のことのみを思ひ患うて、身を世もあられぬ樣子

で、どうやら氣でも狂つたのではあるまいかと思はれるほどであつたのである。その矢先の凶變なので、始終を見て取つた寺の人々は、若しも此の際この事を吉三郎に知らせようものならとても命はあるまいと思つた。それで互ひに警め合つて、そんな事は暖にも出さずに、

『けふ明日の内には、あのお方樣が見えますに違ひないで、さうしたら、とつくりとお物語あそばせよ。』

などゝ、氣休めを云つて、やつれた吉三郎を慰めた。

生一本な心の吉三郎は、これに力を得て、急に氣を引き立てながら、藥を飲むのも忘れて、

『早う逢ひたいな。……まだ來ぬかな。……』

と、獨り語を云ふのであつた。

斯うしてゐる内に、はや三十五日になつたので、寺では吉三郎には隱してお七の供養を營んだ。次いで四十九日になつた時寺へ參り集まつたお七の身内の人達は、

『一寸でも好いで、娘と思ひ合うた若衆といふお方にお引合せ

が願ひたい。』

と云つた。

寺の人々は言下にそれを斥けて、

『譯を話せば、又々大騒ぎが持ちあがりまするぢやて。まあまあ、そつとして置かれた方が宜う御座るぞよ。』

と、安全な策を説いた。

云はれて、身内の人々も初めて氣が附いたらしく、

『これは御尤もな次第ぢや。假にも人たる者の上に立たれる武

士の御身分であつて見れば、この事を聞かれて、よもや、ぢつとして生きて居られるやうな事はあるまい。これは矢張り默つてお匿し申して置く方がよろしからう。』

と、諦めた。

併し最愛の娘の形見として、せめてもの心慰めにしようと云ふので、卒塔婆だけは建てた。

樣子あつての俄坊主

人の命ほど頼み少なくして、而かもつれないものはない。死んでしまひさへすれば、戀も怨みもなかつたのに、丁度お七の百個日の命日に當たつた日に、吉三郎は始めて枕が上がつた。

吉三郎は先づ散歩の試みに、杖をたよりに寺の境内を靜かに歩いて見た。ふと新らしい卒塔婆が建つてゐるのが目に留まつたので、好奇心に駈られるまゝに、何氣なしに近寄つて見た。すると夢にも忘れることの出來なかつた人の名がまざ〳〵と書いてあつたのである。吉三郎は倒れるばかりに驚いた。

『や、や！　斯樣なことになつて居らうとは夢にも知らなんだ……されば扨て、世間の者は然うとは云ふまい、死におくれたやうに取沙汰せられるのも殘念至極ぢや。……』

と、口惜し涙を嚥みながら、あはや腰の刀に手を掛けようとした時、寺の人々が駈け寄つて、無理矢理に止めた。

『どうあつても死なねばならぬと仰やる譯なら、長の年月お近づきになされた人達にお暇乞ひもなさり、方丈樣にもそのお斷りを申上げられて、そして御最後をお極めなられませ。何しろ

當寺では、そなた樣の御兄弟契約をなされたお方樣からお預り申してゐることで御座りますれば、そのお手前への難儀と云ひいろいろ思し合はされまして、どうぞ此の上の憂き名をお立てなされぬやうに遊ばされたう存じまする。』

と、懇々と訓き誡めた。

尤もだと思つたので、吉三郎は兎も角もその場で自害することは思ひ止まつた。併し孰れにせよ、世に生き長らへようと云ふ望みは毛頭ないので、その後意中を方丈に打ち明けた。方丈

はひどく驚いた。

『そなたの義兄の人から呉れ〴〵も私を頼まれて、預かつて居つたのぢやが、その方は今は松前に行つて居られて、この秋頃でなければ戻つて來られぬといふことぢや。それまでの内に、若しもの事があつては、さし當つて迷惑するのは私ぢやぞえ。よろしいか、義兄の方が戻られた上で、どうなと爲られたが好からう。』

住職は色々と意見をしたので、吉三郎も思ひ當つたらしく、